

アジアセンターODAWARA 40周年記念

—— 戦後の日本とMRAの軌跡 ——



アジアセンター-ODAWARA 40周年記念

戦後の日本とMRAの軌跡

ご挨拶

昭和37年（1962）に建設された「アジアセンタ - ODAWARA」は、平成14年10月22日、40周年を迎えました。この間内外の多くの方々のご親身なご支援、ご指導により大過なく運営を続けて来られましたことを心から有り難く思っております。

当初「MRA アジアセンター」と呼ばれたこの建物は、その名の通り当時世界的に活動を展開していたMRA運動の、アジアにおける拠点として構想され、建設されました。しかし昭和37年と言えば、日本の高度成長が緒についたばかりの頃で、東京本部の土地建物のほか、格別の資産を持っていなかった「財団法人MRAハウス」にとって、それはたいへん負担の大きい大型の企画でした。

にもかかわらず、多くの個人ならびに企業の皆さまから多額のご寄付を頂いたうえ、有形無形のご支援を賜った結果、土地の取得から設計、建設等の工程が無事進展し、昭和37年10月22日、池田首相をはじめとして、国の内外から多数の方々をお招きして盛大な開所式を行うことができました。そしてその背景には、MRA運動の理念と活動をこの国に定着させたいという多くの日本人の強い願いがあった事は間違いありません。

そこで財団としては開所40周年を記念して、戦後の日本におけるMRAの活動と、そのなかでアジアセンターが果たしてきた役割を回顧するとともに、数多くの映像やメディア記事、各国で出版された記録など大量の資料の中から主なものを、別添のCD-ROMの形で複製・保存することといたしました。これらの活動の経過を、ほぼ年代順に要約したこの小冊子とともにご覧いただければ幸いです。

なお今回収録したもののほかにも、戦前の活動を含め、財団が保有している各種出版物、映像、映画などは大量かつ多岐に亘っております。これら資料の劣化を防ぎ、半永久的に保存するため、次回はCD-ROMと比べて容量が格段に大きいDVDに全面的に収録することを計画しております。

センターは平成5年に大幅な改修を行い、名称も「アジアセンター ODAWARA」と改めて、地域のニーズに応える良質のゲストハウスならびにセミナーセンターとして運営を続けております。今後とも格別のご支援、ご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

財団法人MRAハウス
代表理事 渋沢雅英

目 次

MRA アジアセンターの竣工と開所式	5
第二次大戦終結後の世界と MRA の活動	9
大型代表団の派遣（1950 年）	13
サンフランシスコ講和条約前後	17
MRA ハウスの取得と財団法人の設立	19
音楽劇「消えゆく島」と創始者ブックマン博士の訪日	21
アジアとの和解	26
冷たい戦争と MRA	29
1. 青年団協議会代表 100 名の渡米	29
2. 西欧社会主義政党との接触	31
3. 三池争議とドイツ炭坑夫による劇 「ホフヌング」(希望)の来日	33
4. 日米安保条約改定への反対闘争を巡って	35
全世界を席卷した劇「タイガー」	38
センター開設後の活動	43
第一回小田原世界大会と音楽劇「宇宙は素晴らしい」	43
第二回小田原世界大会と劇「共産主義を越えて革命へ」	44
各地の高校生を対象とする活動のひろがり	45

「シング・アウト 65」(米国)の来日	47
第三回小田原世界大会と「シング・アウト 65」韓国公演	49
「レッツ・ゴー 66」と武道館公演	50
MRA 移動学校	53
「シング・アウト・アジア」米国公演	55
「涙をこえて」とNHK「ステージ 101」	56
日本外語教育研究所(Language Institute of Japan-LIOJ)	57
東南アジア諸国との知的交流(イースト・ウェスト・セミナー)	58
各種助成事業	59
オフ・キャンパス・アクティビティーズ(OCA)	60
建物の改修と「アジアセンター ODAWARA」の発足	61
略年表	63
付録	66
戦前の MRA と日本での活動	66
ブックマン博士・人と業績	69
CD - ROM ユーザーズガイド	77

MRA アジアセンターの竣工と開所式

1962年10月22日、MRA アジアセンターが竣工し、池田首相をはじめ内外の有力指導者多数の参列を得て盛大な開所式が行われた。



開所式 中央は鈴木十郎市長

これよりさき昭和35年(1960) アジアにおけるMRA活動の拠点としてセンターを建設することが関係者の間で合意され、そのための土地の選定が進められていた。富士山麓の朝霧高原等、幾つかの風光明媚の地が候補に挙がっていたが、アクセスの難しさや価格などの面で異論があり、決定には至っていなかった。たまたま同年5月のある日、国会周辺が日米安保改定に反対するデモ隊に取り巻かれ、議員すらも中に入れないう状態となった。そこでセンター建設の熱心な推進者の一人だった千葉三郎議員から、このいわば予想外の臨時休業を利用して、たまたま国鉄の十河総裁から紹介と推薦のあった小田原の閑院宮邸の土地を見学に行こうという提案があった。早速数名の関係者が湘南電車を利用して(新幹線はまだ未開通)小田原に向かい、宮邸を訪れた。一行が異口同音に感動したのは、相模湾から伊豆諸島、房総半島までを見渡す庭園からの風景であった。しかも十河総裁の

強いリーダーシップで着工した新幹線が二年後に開通の予定で、小田原の新駅の建設も始まるということで、この土地を建設予定地とする案が俄に現実性を帯びることとなった。



旧閑院宮邸より相模湾を望む

閑院宮純仁親王にもお目にかかり、公的な利益に役に立つという条件で、土地の売却にもご異存がないことを確認し、建設の計画が急速に推進されることとなった。昭和36年(1961)4月には工藤昭四郎都民銀行頭取を理事長として「MRAアジアセンター建設後援会」が組織され、理事として十河信二国鉄総裁、千葉

三郎自民党国会議員、山際正道日銀総裁、渋沢敬三元大蔵大臣、早川慎一鉄道弘済会会長らが名を連ねた。約8,000坪の土地は閑院宮から一億円で譲り受けることとなり、その代金は当面都民銀行からの借入金で賄うこととし、建設の計画が始動した。基本設計はスイスのコーのセンターの整備にも関わったチャールス・ルドルフという建築家に依頼し、顧問吉村順三氏のもとに、施工は清水建設を想定して準備が進められた。

小田原市もこの計画を全面的に支持し、ビルマの高僧、ウー・ナラダ師による地鎮祭をはじめ、建築中の多くの行事に鈴木市長自ら参加されたほか、固定資産税の減免など、有形無形に多大の支援を与えられた。

工事の開始は昭和37年(1962)1月、以来約10ヶ月の突貫工事により、同37年(1962)10月には地下2階、地上5階、総面積7,500平方メートルに及ぶセンターが完工した。



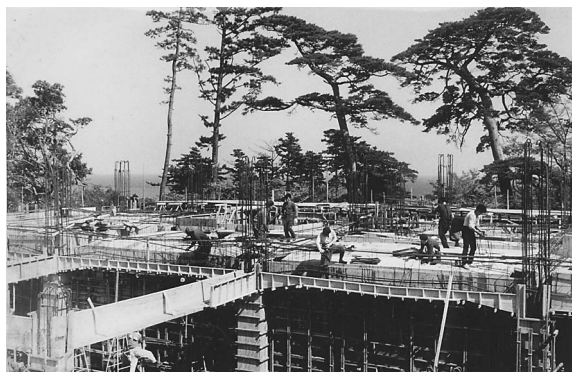
ビルマの高僧ウー・ナラダ師による地鎮祭
右端は鈴木市長

4億円に上る建築費と1億円の設備費を賄うために各企業や団体、全国の多数の個人から心のこもった寄付が寄せられた。一方諸外国からも下記のような金品の寄贈を受けた。

- ・毛布、家具
（オーストラリア、ニュージーランド）
- ・食器洗浄機（ドイツ）
- ・水回り器具（スイス）
- ・36mm 映写機一式
（オランダ、フィリップス社）



鈴木市長と
設計者ルドルフ氏



建築風景 1



建築風景 2



開所式 池田首相

した中で旧陸軍士官学校出身で、朴氏の片腕を勤める金鐘泌氏が、かねがね興味を寄せていたMRA運動への参加を理由として非公式に来日したことは極めて異例で、内外の注目を集めた。金氏は小田原の行事が終わったあと数日間東京に滞在し、関係者と接触したが、その結果がやがて「金・大平メモ」として結実し、3年後に実現する日韓正常化への布石となっていった。

開所式には金氏のほか各国の要人多数が参加され、台湾の蒋介石総統は何応欽將軍に託して自筆の書を寄贈され、ベトナムのゴ・ディン・ディエム大統領からは漆塗りの美しいキャビネットを贈られた。



吉田元首相、左は山際日銀総裁、
右隣は近藤鶴代議員

10月22日、池田首相の臨席を得て行われた開所式には、韓国から金鐘泌中央情報部長が特に来日した。当時日韓両国の間には国交がなく、特に韓国では朴正熙將軍を中心とする革命政権が成立した直後であり、両国政府間の交流は中断に近い状況にあった。そう



岸前首相と金鐘泌韓国中央情報部長

終戦後17年、高度成長が本格化する前にこのような計画の実現が可能となったのは、戦後世界の再建に関わる国際MRA運動の、日本に対する物心両面での広範な貢献と、それに感動した数多くの人々の積極的な協力と支援によるものであった。

第二次大戦終結後の世界と MRA の活動

1945年5月ナチス・ドイツが降伏し、西欧における6年余に亘る戦争が終わった。MRAはその直後から、創始者フランク・ブックマン博士の強い意志と指導のもとに、戦後の西欧の再建への努力を開始した。スイスのMRA支持者たちは、自国が中立を



コー マウンテンハウス

守り、戦禍を免れた事への感謝と代償の意味を込めて、ヴォー県モントロー市の背後にそびえる山の上のコー（Caux-sur-Montreux）という村にあった旧パレスホテルを取得し、これを改装してMRAの拠点としてブックマン博士に提供した。ドイツのアデナウ



コーを訪れたドイツ アデナウアー首相



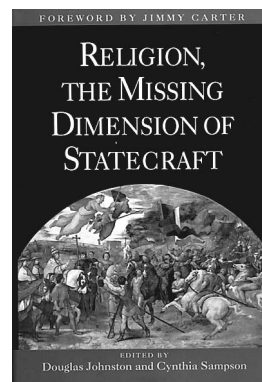
コーを訪れたフランス シューマン外相

アー首相、フランスのシューマン外相をはじめ各国から多数の人材がコーでのMRAの集會に参加し、ドイツへの恐怖や憎悪の精算と和解の増進をはかり、欧州石炭鉄鋼共同体の発足から、のちにECの結成に至る欧州統合の機運の醸成に大きな効果を上げた。

(これらの経緯は「Missing Dimension of Statecraft」, Chapter 4 ‘Franco-German Reconciliation: The Overlooked Role of the Moral Re-Armament Movement’ Douglas Johnston and Cynthia Sampson Ed., Oxford University Press p 37-57 参照)

欧州での終戦に続いて、1945年8月15日、日本が連合国軍への降伏を受け入れ、占領軍総司令官として8月30日マカーサー元帥が厚木に到着した。

西欧の場合と比べて、日本との間には地理的、文化的な距離が大きかったので、日本におけるMRAの活動は、まずもって状況を把握し、戦後の再建を担う可能性のある人材を発見、発掘することから始めなければならなかった。長い戦争で孤立していた日本人に、戦後の世界の現状を目の当たりに見せるとともに、世界に向かっては、日本についての意識を喚起させるという目的を掲げて、息の長い努力が進められた。そしてその第一段階として、戦前のMRA運動を通して接触のあった日本人をはじめ、各界を代表する多くの人材を海外に招待する事が計画された。といっても、当時の日本は占領軍が全権を持っていたので、日本人の海外渡航については、ドイツの場合と同様、米国の上院議員その他連合国側の多くの人脈を通してマカーサー元帥をはじめGHQ幹部への働きかけが特に重要だった。



1948年には戦前からMRAと接触のあった元駐米大使、外務次官堀内謙介、三井高維、相馬恵胤各夫妻をはじめ約10名の日本人が渡米し、ロサンゼルスにおけるMRAの会合に参加した。

ついで1949年には、片山哲元首相夫妻がスイスのコーにおける集会に出席し、帰途、欧州各国を歴訪し、ルール地方、パリ、ロンドン等を訪問し、米国経由で帰国した。出発前の記者会見で元首相が口にした「青い鳥を探しに行く」という言葉が、当時の日本人の気持ちを表現したものとして注目を集めた。



ロス空港で堀内謙介元駐米大使を迎えるブクマン博士、中央はG・イーストマン氏



コーを訪問した片山元首相夫妻

これらの予備的な活動によって日本の現状についてかなりの情報を集めた上で、昭和25年(1950) 各界、各地域の有力指導者を網羅した代表団の派遣が計画された。2月3日、ブクマン博士の意図を受けて米国人ケン・トウィッチェル(Kenaston Twitchell)と英国人バズル・エントウィッスル(Basil Entwistle)の両名が来日し、占領軍司令部の支援のもとに吉田首相をはじめ各界の指導者と会談、長野、関西、広島、九州等を歴訪、4月下旬に

はマカーサー総司令官と面談し、大筋の合意を得た上で、2ヶ月あまりの緊急な準備活動の結果、6月12日、フィリピン航空の特別機を仕立てて大型代表団が出発した。

当時以降数年間の日本におけるMRAの活動の詳細については、バズル・エントウィッスル著（藤田幸久訳）「日本の進路を決めた10年」（ジャパン・タイムズ社刊）を参照されたい。



訪欧中の片山元首相夫妻と一行



大型代表団の派遣（1950年）

昭和25年（1950）6月12日、吉田首相の主催により、スイスのMRA大会に向かう日本人代表団のための歡送昼食会が行われた。戦後、民間の企画としてこうした大型のグループが海外に渡航するのは初めてのことであり、メディアはもとより多くの人の注目を集めていた。同日夕刻、一行は羽田空港からフィリピン航空機で出発、マニラ、カルカッタ、カラチ、テルアビブ、ローマ等を経由してジュネーヴに到着、陸路レマン湖の北岸をローザンヌからモントローに向かい、湖畔で左折して急坂を登り、標高約1,000メートルの高地にある旧パレスホテル、当時は既にマウンテン・ハウスと呼ばれていたMRAセンターに到着した。



ジュネーヴに到着した大型代表団

玄関の外にはブックマン博士をはじめ多数のMRA関係者が出迎え、国際コーラスが「君が代」を歌って歓迎した。第二次大戦の責任に加え、占領地での残虐行為に対して全世界からの非難にさらされ、自信を失っていた日本人のグループが、ブックマン博士とその友人達のこうした心のこもった歓迎に、ことのほか感動したことは想像に難くない。



アデナウアー首相（着席）と左から
北村徳太郎議員、福田篤泰議員、
青木三重県知事、中島勝治氏、中曽根康弘議員

毎日の集会や、三度三度の食事などを通して代表達は、長い間想像することもできなかった戦後世界の姿に触れ、多大な刺激を受けると共に、雪と氷に輝くダン・デュ・ミディの鋭鋒と向かい合い、レマン湖を見下ろす、美しく、かつ静寂な環境の中で、戦前から戦後にかけて、動乱の中で生きてきた自分たちの過去を思い、また今や世界と共に生きることを運命づけられている将来の日本について考える、またとない機会を持つこととなった。そうしたな

かで、戦争中はもとより、戦後も色々な理由で対立抗争を続けてきたそれぞれの過去を反省し、謙虚な謝罪と悔悟を表明するものもあり、また中曽根康弘議員のように「10年後には首相の座を射止める」と自信を持って抱負を語る若い政治家もあった。

それぞれの立場から世界の中の日本について考えさせられている最中の6月25日、予想もしていなかった北朝鮮による韓国攻撃が始まり、それは時を移さず国連軍対ソ連、中国という、大型で危険な構図を持つ本格的な戦争に発展していった。それは従来の占領政策を、対日経済支援指向に変換させるなど、日本を取り巻く世界の環境が一変する契機となった。



左から福田篤泰議員、栗山長次郎議員、
ダレス國務長官顧問

2週間のコー滞在後、一行は、ベルンではスイス連邦の大統領、ジュネーヴでは国際赤十字総裁を表敬訪問し、ついで西ドイツに移り、MRAの斡旋でボンではアデナウアー首相と会



ベルリンを訪問した一行

下院の議場では同じく北村徳太郎議員が戦争について謝罪した。日本人が米国の権力の中枢である国会議場で発言したのは戦後初めてのことであり、これらの発言は新聞やラジオで広く報道された。

一行はその後サンフランシスコ、ロサンゼルス経由で帰国したが、今回の外遊の成果について北村徳太郎議員が天皇に拝謁報告したほか、中曽根議員をはじめ代表団に参加した多数の国会議員や組合指導者等によって数百回に上る報告会、講演会等が全国的に展開された。

見し、デュッセルドルフ、ブレーメン、ハンブルグ等を視察、7月14日の革命記念日にはパリでオリエール大統領の特別席で、いわゆるパリ祭のパレードを見学、英国では伝統的なロンドン市長のレセプションに参加するなど充実した日程をこなした後、大西洋を横断して米国に向かった。

ニューヨークではトレグヴェ・リー国連事務総長を表敬し、ワシントンでは上院のレセプションと下院の昼食会に招かれたうえ、栗山長次郎衆議院議員ほかの国会議員が上院の議場に招かれ西山千氏の通訳で、吉田首相の代理という資格で、戦争に対する悔恨と謝罪の意を表明し、



ワシントン国会議事堂を訪れた代表団

このようにMRAによる戦後の対日活動が、短期間でかなりの効果を上げた背景には次のような事情があったものと思われる：

1．精神的空白

国家目標の喪失による精神的飢餓状態が続いていた中で、占領軍とは異なり、未来志向で、全人類を対象とする公平な価値観を主張するMRAが日本人に強い関心と希望を起こさせたこと。

2．融合のメッセージ

戦争中の過度の集中の反動として社会の分裂・拡散が急速に進行し、夫婦、親子、労使など戦前の社会基盤が次々と崩れてゆく中で、世界全体に向かって融合、無私、愛等の道義的価値の復興を提唱するMRAが非常に魅力的に見えたこと。

3．戦争への悔恨と世界からの孤立

戦争中の日本軍による残虐行為への非難が増大する中で、勝者、敗者を問わず道義的反省を提唱するMRAのメッセージが快いものに聞こえたこと。

4．労使関係への新しいアプローチ

大型代表団のスイス滞在中、大阪の警視總監と先鋭な組合指導者との間に劇的な和解が生まれ、当時深刻化しつつあった労使問題への新しいアプローチとして注目を集めたこと。事実50年代を通じてMRAは東芝、石川島、電電公社等で労働争議の合理的な解決を支援したり、社会党の左右両派など対立する政治集団の間で、対話を始動したりする効果をあげた。拡大を続ける共産主義の攻勢にさらされ、出口の見えない分裂、抗争に疲れていた多くの組合指導者や左翼系政治家が、MRAの中に解決の糸口を見いだす例も多かった。

5．日本の進路への示唆

対外関係を占領軍が独占する中で、将来の国の在り方や方向を考えることの出来なかった国民にとって、MRAは戦後の日本が取り組むべき望ましい世界政策を示唆しているように見えたこと。

(ドイツの場合との比較については「Missing Dimension of Statecraft」を参照)

サンフランシスコ講和条約前後

1950年の代表団派遣に続き、MRAは毎年スイスのコーヤアメリカのマキノ島で開かれる大会に日本の指導層を招いた。

1951年にはサンフランシスコ講和条約が締結されたが、ブックマン博士はその前後に会議の円滑な進行を願って側面的な支援を惜しまなかった。講和会議が開催される9月に入るとマーク・ホプキンス・ホテルの最上階のレストランに大型テーブルを長期予約し、連日各国の代



劇「ジョサム・ヴァレー」の一場面

表や関係者を食事に招き、交渉の促進を説得したうえ、食後は市内のゲアリー劇場で上演中のMRAの音楽劇「ジョサム・ヴァレー (Jotham Valley)」の公演に招待した。米国西部の農場を舞台に、対立の解消と和解のプロセスを劇化したもので、旧交戦国代表はもとより条約に反対していた左派社会党の議員などにも多大の感動を与えた。

日本側全権は、吉田茂、池田勇人、星島二郎、苫米地義三、徳川宗敬、一万田尚登、そのほかに代理や顧問として片山哲、山田節男等が加わり、加藤シヅエ、戸叶里子等社会党議員も公式オブザーバーとして参加していた。

9月8日、条約の調印直後、フランスのシューマン外相はブックマン博士に向かって、「今日の調印の2年前、貴下は既に日本との平和を築いていた」と言ってその努力を讃えた。

ブックマン博士のこうした活動が、一万田日銀総裁や星島二郎議員など全権をはじめ日本側参加者に強い印象を与え、日本にも活動の拠点を設置しようという動きが活発化し、その結果が翌年のMRAハウスの取得と、これに伴う「財団法人MRAハウス 設立に繋がる事となった。



世界大会に出発する代表团
1952年5月



サンフランシスコ市庁で市長表敬後の日本代表 1951年7月

MRA ハウスの取得と財団法人の設立

これよりさき 1950 年の代表団の帰国以降、MRA の認知度が全国的に高まり、各地で活発な集会や活動が行われるようになった。当時はまた国内の思想的対立が激化しつつあり、保革は勿論労組や社会党内部でも左右の抗争が増幅を続けていた。そうした中で精神的改革を通しての和解や融和を提唱する MRA のメッセージは各方面で注目され、現に幾つかの企業では労使関係の改善に寄与しつつあった。

一方海外で、各国に拠点を持って活動している MRA の現状に触れた人々の間では、日本にも何らかの活動の中心を設けることへの要望が大きくなっていった。そしてその具体化の直接の契機となったのは、講和条約交渉に際して、ブックマン博士がサンフランシスコで熱心に展開した支援活動であった。一万田尚登、星島二郎など日本側代表を努めた人々をはじめ、かねてから MRA との接触が大きかった最高裁長官田中耕太郎、文部大臣天野貞祐、経団連会長石川一郎、東芝社長石坂泰三、毎日新聞社主本田親男などが東京における MRA 本部開設を熱心に推進し始めた。拠点が出来れば、政治的な党派や信条を越えて、多くの人々が冷静で真摯な雰囲気の中で、独立後の日本の対外、対内政策の枠組みを考えることもできるようになると考えられていた。

昭和 26 年（1951）12 月には米国のアレクサンダー・スミス上院議員（共和党）とスパークマン下院議員（民主党）が来日し、一万田尚登、本田親男、加藤勘十夫妻、栗山長次郎、全電通の久保委員長、堀内謙介、三井・相馬両夫妻（相馬雪香通訳）等が参加して夕食会が行われた。



MRA ハウス

将来の世界や日本に対する日本側の正直で真摯な考え方が両議員に強い印象を与えると共に、日本側もこうした国際的な対話のための恒常的な場を持つことの重要性を痛感し、具体的行動に移る決心をした。

12月25日には一万田尚登の主宰で、MRA本部設置について討議するため、日銀総裁公邸で昼食会が行われ、石川一郎経団連会長、千金良三菱銀行頭取、山根大正海上火災社長、犬丸帝國ホテル社長等が出席した。

昭和27年(1952)初頭には一万田尚登、石坂泰三、田代茂樹、倉田主税、湯浅佑一、栗山長次郎、加藤勸十、戸叶里子等25名の有力者が会合を持ち、港区麻布所在の土地建物を1,600万円で取得することを決め、一万田の提案でその資金を当面は寄付と借入金で賄うこととなった。

3月末には予定通り資金の手当てが完了し、4月2日、「MRAハウス」を設置、アントウイスル、相馬豊胤両夫妻が入居し、活動が開始された。



MRAハウスのベランダ

一方施設の母体として寄付や借入金の受け入れをはじめ、財務を管理し将来の活動を支援する目的で「財団法人MRAハウス」の設立が進められ、昭和27年(1952)3月、文部省から認可証が交付された。また今後の活動を資金的に支援するため任意団体として「MRA協力会」が設置され多くの企業が名を連ねて定期的な寄付を受け入れる体制が整った。

音楽劇「消えゆく島」と創始者ブックマン博士の訪日

昭和30年(1955)6月、MRAの音楽劇「消えゆく島(Vanishing Island)」が来日した。100名を越える出演者のほか、舞台装置や照明に関わる技術者集団に加え、デンマーク保守党党首で元NATO議長のオルピオン・クラフト、チュニジアのマスムディ国務相(後に外相)、英国労働党下院議員ジョン・マクガバン、スイスの元大統領オスカー・ライムグラーパー、東ナイジェリア国会議員B. C. オクー、イランのパーレビ国王代表マジド・モカバル等、25カ国を代表する総勢180人に及ぶグループが羽田に到着した。



「消えゆく島」代表団一行と輸送した米軍機

戦後のMRAはその理念を普及する手段として演劇、映画など視聴覚メディアを多用するようになった。言語だけでは伝えきれない人情の機微や道義的真実を劇化し、視覚を通して情念に訴えようとする手法である。それは対話や講演とは違って不特定、かつ多数の観衆への接触を可能にし、メッセージが受け手の心の琴線に触れ、予想を超えた反応を見せる場合も多かった。

ピーター・ハウードの原作になる「消えゆく島」は、「自由世界」「共産主義世界」そして「新しい世界」という三幕によって構成され、それぞれの世界の政治的、経済的、道義的弱点を指摘し、これらを克服して「新しい世界」を作る可能性と、それを実現するために個人、家族、組織などが取り組むべき役割を訴えていた。当時の自由世界には、マカーシー旋風等が自由陣営の弱さと欠陥を露呈する一方、「東風が西風を圧する」という毛沢東の言葉に見られるような共産主義勢力の急速な拡大への不安と焦燥が蔓延していた。そしてMRAはより優れた第三の道を提示することによってそうした状況に効果的な一石を投げようとしていた。



劇中より「共産主義世界」



劇中の一場面



劇中より「自由世界」

6月15日、首相官邸で鳩山首相主催の歓迎レセプションが行われ、国会では対立する各政党が一致して一行を歓迎した。衆議院では両保守党と左右社会党が4時間半に及ぶレセプションに同席し、参議院では河合弥八議長が「MRAを基盤とする国の再建こそが優先課題である」として歓迎の意を表した。



観劇する鳩山首相夫妻（東京劇場）

10日間の滞在中、東京では東京劇場、大阪では北野劇場で、皇族、首相夫妻、20カ国の大公使、各界各層の人々が観劇し、NHKテレビはその抜粋を45分間全国に放映した。

グループは登場人物が100名を越す大型の音楽劇を、都市の大劇場でも、また野外でも、短時間で設置可

能で、かつ航空機による長距離の移動を考慮した独特の舞台や音響装置を携行していた。事実日本訪問後数ヶ月をかけて歴訪したアジア各国、中近東等では王宮の庭や町の広場で上演され、驚くほど多数の群衆を集めた。それは当時のMRAの世界戦略の一環として、人的にも、物的にも持てる資源を総動員して準備された企画であった。

日本におけるMRAの演劇活動としては、50年代初期に、アラン・ソーニル原作の「忘れられた要素」ならびにピーター・ハワード作による「ボス」という二つの劇がしばしば上演された。1951年には「忘れられた要素」が、一万田尚登、市村清、石坂泰三、星島二郎ほか10数名の有力者を世話人として、9月25 - 27日に



代表団に同行した
マスムディ チュンジア 国務大臣と鳩山首相

帝劇で上演された。また「ボス」は1955年3月から4月にかけて第一生命ホール、丸の内ホールで、山際正道、石坂泰三、諸井貫一、道面豊信等の司会で上演され、秩父宮妃、鳩山首相夫人ほか政府要人と共に日産自動車、日立造船等産業労働団体の人々が観賞した。4月26日には鳩山首相の肝いりで首相官邸で上演され、30名余りの国会議員が観劇した。

ブックマン博士の訪日



ブックマン博士を迎える一万田大蔵大臣
(羽田空港)

昭和31年(1956)4月26日、ブックマン博士が戦後初めて来日し、午後5時、羽田空港に到着した。一万田大蔵大臣をはじめ各党の国会議員、組合指導者、日本青年団協議会幹部等、空港は多数の出迎えの人で賑わった。「日本はアジアの灯台であり、発電所となる国」というのが、この人達に対する

博士の最初のメッセージであった。歓迎の様子はラジオ、テレビで全国に放送された。

戦後のブックマン博士の、日本への親身で、継続的な支援への感謝を込めて、鳩山首相夫妻が天皇誕生日に博士を音羽の自宅に招いたほか、国会や東京都、日銀総裁公邸、滝田全労議長、柳沢錬三全造船石川島分会委員長その他組合関係者からも誠意のこもった歓迎が示され、政府は勲二等旭日章を贈った。

5月2日、6日間の滞在が終わって博士一行は台北に向かい、蒋介石総統と会談した後、フィリピンではマグサイサイ大統領、タイではピブン・ソクラム首相、ベトナムでは

ゴ・ディン・ディエム大統領等各国の首脳に会い、南回りでヨーロッパに向かった。各国ともそれぞれ勲章を贈って博士の努力に報いた。



ブッカマン博士を自邸に迎える鳩山首相



重光外相より勲二等旭日章を受ける
ブッカマン博士



安井東京都知事より都の鍵を受ける
ブッカマン博士

アジアとの和解

昭和30年(1955)6月、音楽劇「消えゆく島」は日本での10日間の公演後、台湾を經由してフィリピンに向かった。このとき国会議員星島二郎(自民党)、加藤勲十(社会党)、相馬雪香、中島勝治等4名の日本人がこれに同行してマニラを訪問することとなった。当時のフィリピンでは戦争中の日本の残虐行為への激しい怒りが強く残っていて、4名の入国もMRAを通じての政府要路への特別な折衝の結果、ようやく可能になったものであった。

「消えゆく島」の終演後星島は、戦後初めて壇上に日本人の姿を見て怒号する観客に向かって、相馬の通訳で真摯な謝罪の言葉を述べた。それが契機となって、マグサイサイ大統領は日本人4名を含む一行を引見し、その後MRAを通しての対日接触を積極的に支援し、昭和32年(1957)の春、バギオで開催が計画されていたMRAの会議に、日本人



バギオ会議 星島二郎議員、
左は通訳する相馬雪香氏

の参加が特に容認されることとなった。残念なことに大統領はこの集会の直前に航空機事故で急逝し、会議にはそのあとを受けて急遽就任したカルロス・ガルシア大統領が出席することとなった。

バギオでのMRA会議には大統領のほか、フィリピンからはロス・リム上院議員、労働組合関係の有力者パート・オカ、ファー・イースタン大学学長夫妻、その他多数が参加したほか、台湾からは何応欽將軍、韓国からは朴賢淑国会議員(前厚生相)、鄭濟国会議



ガルシア比大統領、右隣はリム上院議員

員、尹城淳国会外務委員長等、また日本からは星島二郎、加藤シヅエ、相馬雪香、柳沢錬三ほか十数名が出席した。日本人に対するフィリピン側の怒りと憎悪は引き続き根強く、会議は緊迫した雰囲気のものとなったが、日本人グループの真摯な反省と謝罪によって閉会の頃には個人的にも、また

集団的にも多少とも心がほぐれ、正直な対話が可能な雰囲気が生まれ始めた。

日本側にとって更に困難だったのは、36年の「日帝」による支配についての鮮明な記憶に加え、戦後の南北分断と朝鮮戦争による苦痛を抱える韓国人グループとの対応だった。彼らの態度は一樣に硬く、当初はとりつく島のない雰囲気だった。日本側もそれを予想して単なる個人的な謝罪に加えて、当時行き詰まっていた外交関係の面でも何らかの建設的発



左から星島二郎議員、韓国代表朴賢淑議員（前厚生相）
尹城淳外務委員長、加藤シヅエ議員

言をすべきだと考え、出発前に岸首相並びに外交関係者との会合を持ち、その意を伝える形で、当時交渉の癆となっていたいわゆる久保田発言の取り消しと、財産請求権放棄の正式な意思表示を行った。その結果両国、特に女性の代表達の間になんげつつ個人的な信頼関係が芽生え始め、そうした経緯が数年後に始まる日韓正常化交渉への布石の一つとなることとなった。

前述したように戦後の欧州では、ドイツとフランスなど旧敵国との間の関係改善が地域再建の前提となっており、MRA もコーのセンターを拠点に最大限の努力を傾け、憎悪、怨恨、悔恨等の感情が渦巻く中で、ドイツ側の謝罪、フランス側の赦しや過去の憎しみへの反省等が生まれ、ドイツ自体も戦後直ちに旧交戦国やイスラエルへの謝罪や贖罪を、国是ともいべき政府の重要な政策として取り上げることとなった。その結果、当初は個人ベースの現象だった和解が、やがて両国関係のスタンスの見直し、ついで政策的な対応に発展していった。アデナウアー首相、シューマン外相など有力者のコー訪問もこれを促進し、両国を中心とする欧州鉄鋼石炭共同体機構など、戦後の西欧の政治経済の骨格を作る動きに結実していった。

これとは対照的に日本の場合は、1950年の代表団が米欧各国で戦争に対する遺憾と謝罪の意を表明した事は事実であるが、肝心のアジア各国の代表がその場に存在しなかったこともあり、私的にも公的にも戦争中の不法行為に対する謝罪や、贖罪のための具体的な対応は起こらなかった。その背景の一つとして、当時はタイを除く東南アジアの国々はまだ植民地体制に組み込まれており、国際的な認知を受けていなかったこと、また中国はすでに苛烈な国共内戦を闘っており、1951年以降は韓国も朝鮮戦争に巻き込まれてしまったことが挙げられよう。そのため各国とも戦前の被害の賠償を求める余裕と機会がなく、また西側世界で行われる各種国際会議に招かれる事も少なかった。結果として日本との過去の関係は、潜在的には双方とも意識していたが、公開の場で議論されることがないままで時が過ぎていった。このことが日本人の意識の中で、アジアでの過去の行動への賠償責任という概念を風化させると共に、問題をいっそう困難なものとしてしまったように思われる。

冷たい戦争と MRA

1. 青年団協議会代表 100 名の渡米

昭和 30 年代に入ると（1955 以降）東西両陣営の間の緊張が増大し、海外の MRA は日本の将来をことのほか憂慮するようになった。事実国内では鳩山、石橋両内閣の退陣のあとを受けて岸内閣が成立し、警職法、教員に対する勤務評定、さらには日米安保条約改定など一連の政策課題を巡って国論の二極化が進み、学生、労組、左派政党などが連携して全国的な運動を展開するなど、政治の緊迫化が進行しはじめた。



ブッカマン博士を囲む日本青年団協議会役員

こうしたなかで MRA は国際共産主義陣営、特に中国が明確な戦略をもって日本の各界指導層に接近し、その考え方に影響を与えようとしているという認識をもち、共産主義を越える、より優れた理念を普及させることでこれに対抗しなければならないと考えられるようになった。

当時は米国国務省をはじめ自由主義陣営の側も各種の招待戦略を展開していたが、MRAの視点から見ると、とかく官僚的、形式的で、所期の効果を上げていないように思われた。そこで昭和32年（1957）夏、ブックマン博士は、日本青年団協議会の役員100名をマキノ島の世界大会に招待するという大型企画の実現に踏み切った。



マキノ島 MRA センター全景

その前年、周恩来首相が青年団協議会副会長の寒河江善秋氏を名指して招き、心のこもった歓迎をしたという情報も、こうした計画を始動する契機となったかもしれない。青年団協議会が当時の日本にどれだけの影響力を持っているのかは正確にはわからなかったが、ブックマン博士は速やかに行動を起こすべきであると考え、全国的な規模でMRAへの認知度を高めるとともに、「草の根」の指導者を通してその理念を全国に普及する事を決意したと思われる。とは言っても当時の「財団法人MRAハウス」には100名の渡航に関する経費の負担能力はなく、結局その大半がブックマン博士ならびに周辺の心ある個人の浄財によって賄われる結果となった。



劇「明日への道」一場面



劇「明日への道」一場面

全国各都道府県の青年団協議会の支部からそれぞれ2名、本部役員を含めて100名を越える青年指導者が、数ヶ月の予定で一斉に渡米するという企画は日本の耳目を驚かせ、地方のメディアを通してMRAの認知度は一挙に高まった。しかし反面で、言語はもとより国際的経験をほとんど持たない地方の青年多数をマキノ島のセンターで受け入れるというのは、通訳だけを考えても極めて労働集約的な企画であった。食事やスポーツ、各種集会や行事を通じての世界各国の青年との交流、映画演劇の鑑賞、ミシガン州近郊の視察や観光などが主たる行事であり、それがブックマン博士の意図と希望に見合うだけの効果を上げたかどうかはわからない。しかしこれだけの数の地方の青年指導者に、海外の生活や考え方と直接触れ合う機会を与えたことはかなりのインパクトを持ったに違いない。

MRAの音楽や映画、演劇などに触発された青年の間で、MRAを普及する手段として日本でも演劇を作ろうという気運が起こり、富山県の青年を中心として「明日への道」と題する4幕の劇が書かれ、演出され、マキノ島の劇場で上演された。農村の生活、農業用水を巡っての村同士の熾烈な争いを背景として、MRAの影響を受けた数名のボランティアの真摯な努力によって地域の平和と繁栄が保たれるというそのストーリーは極めて日本的で、各国の人々に多大の感銘を与えた。帰国後は全国各地はもとよりフィリピンでも上演するなど成果を上げた。因みにこれは日本人の手による初めてのMRAの演劇で、その後次々と書かれ、上演され、映画化された多くの作品の先駆をなすこととなった。



2. 西欧社会主義政党との接触

昭和34年(1959)夏、スイスのコーにおけるMRAの集会に参加していた加藤シヅエ参議院議員、塚本三郎衆議院議員をはじめとする社会党関係者のグループが、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、オランダ、フランス、英国を歴訪し、それぞれの国の社会主義政党の指導者多数と会見した。

当時の日本では日米安全保障条約の改定を巡って左右の対立が激しさを増し、反対する陣営は学生、婦人、労組等市民層を広く動員して、岸政権の正当性に異議を唱え、自民党政策への反発を強めていた。そうした中で革新陣営の側には、外部からの数の圧力に屈し、自らの良識に反して付和雷同するものが多く、一方体制側にも種々の政治的思惑から結束を乱そうとする動きがあった。状況が切迫し、暴力が支配しがちな場面では、本来なら通常の政争に過ぎないこうした動きも、なにかのきっかけで全体の流れを、予想もしなかった方向に変えてゆく危険をはらんでいた。



ブランドベルリン市長と塚本三郎、
加藤シヅエ両議員

そうした中で、この年コーを訪問した社会党関係者たちは、この際西欧各国を訪問し、それぞれの国で活動している社会主義者たちの見方、考え方を知りたいと考え、各地の



モレー フランス社会党党首（元首相）
と加藤、塚本両議員

MRAの支援を得て、8月31日にスイスを出発、僅か2週間の間に、特別機などを利用して7カ国を回るというハードな日程をこなすこととなった。

ベルリン市長のウィリー・ブランド、フランス社会党の党首で元首相のギー・モレー、フィンランド社会党の父と言われるタンナー元総理など、ヨーロッパでも一流の指導者を歴訪した結果は、非常に実り多いものとなった。モレー元首相は、1958年、人民戦線の運動の高まりの中で、こうした形での政局への圧力は西欧における自由と民主主義の崩壊に繋がるとの確信から、ドゴール政権支持に切り替えた経緯を語り、ブランド市長は、「ファッショであれ、共産主義であれ、ドイツにとって全体主義の経験は一度で沢山だ」と述べた。

加藤参議院議員は、このときの体験を読売新聞への寄稿の中で、「各国の社会主義指導者達は階級闘争は既に時代遅れであり、(中略)原子時代の今日、階級闘争を押し進めることは核戦争への道であると考えている」と述べ、われわれ社会主義者はよりよい社会制度を作るために闘わなければならないが、どんなにより制度ができ



ベルリンに到着した一行

てもそれを運営する人間を変えなければ、結局は同じ搾取社会を作る結果になってしまうだろうと主張し、結びとして、「資本家をも、共産主義者をも変えることができる大きい思想に生きること、それが真の社会主義者の使命だと私は信じている。」と述べた。

僅か2週間の行程であったが、社会党関係者によるこのときの西欧行脚は、革新陣営一般の考え方に新しいアングルをもたらし、それが後の加藤書簡(後述)に繋がったと言う点で、その意義は非常に大きかったと言えよう。

3. 三池争議とドイツ炭坑夫による劇「ホフヌング」(希望)の来日

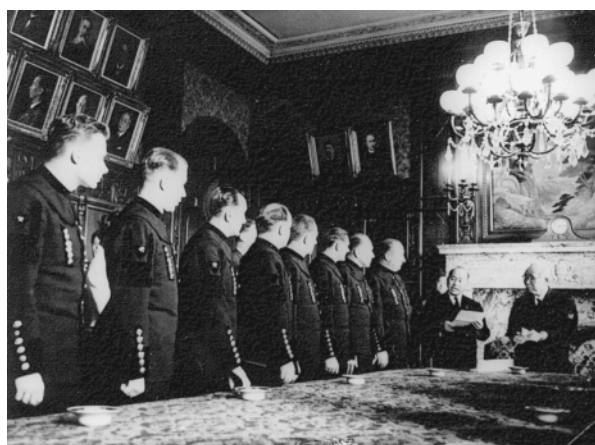
日本における思想的対立の焦点のひとつが労使の対決であり、中でも長期に亘って熾烈を極めたのが三池炭坑の争議であった。MRAはこうした状況に一石を投じたいという意

図を持って、ドイツ・ルール地方の炭坑夫のグループによる自作自演の劇「ホフヌング (Hoffnung)」（希望）を日本に派遣する事となった。一行は昭和35年（1960）3月14日羽田空港に到着し、5月4日離日して米国に向かうまでの7週間、国鉄が提供した特別列車などを利用して東京から関西経由九州を訪問し、帰途は反転して北海道まで行き、国鉄、警察、韓国居留民団、三池炭鉱労働者並びに大牟田市民、自衛隊などでの特別公演を含め、前後42回の公演を行い、49,000名が観劇した。

4月13日、一行は三池炭鉱の新旧労組が流血の衝突をしてから2週間も経っていない大牟田市に到着し、鉢巻姿の旧組合員がピケを張り、新組合員が大声で市民に呼びかける中、午後は闘争中の労組員とその家族で満員の市民会館で上演し、夜は市民一般を対象として再演、



劇「ホフヌング」一場面



清瀬一郎衆議院議長を表敬訪問

さらに要望が強かったため、翌朝9時から各坑からの労働者並びに経営者を前に3回目の公演を行った。KBCテレビは劇自体と出演者の声を北九州全域100万の視聴者に向かって放映した。

石炭産業が石油への転換を迫られる中で、流血の惨事を伴いながら産業構造の整備再生に努力しているさな

かに、まったく同質の難問を抱えるドイツの石炭産業が、思い切った技術革新と労使協調により危機の打開に努めている現実を、当面する労働者自身の口から聞くことの意義は大きく、毎日新聞、西日本新聞、北海道新聞、時事新報、神戸新聞など各地のマスコミに取り上げられ、左右両陣営の対立の焦点の一つとなっていた炭鉱問題に、多くの建設的な示唆をもたらすこととなった。

4. 日米安保条約改定への反対闘争を巡って

昭和35年(1960)の春から夏にかけて、のちに「60年安保」と呼ばれた一連の抗争が激化するなかで、東京のMRAハウスは、複雑な対立に巻き込まれた多くの人々が、立場の違いを越えて本音で話をする事ができる、ほとんど唯一の場所を提供するという不思議な運命を担うこととなった。

当時の世界を事実上分断していた米中ソ3国の力関係の現実から見れば、国内の思想的対立がどれほど激しかったにせよ、それだけの理由で日本が米国の傘を離れて共産主義陣営に参加するという可能性は少なかったように思われる。しかし国会が連日赤旗を掲げたデモ隊に取り巻かれ、院内でも議事や決議の多くが、対立する議員たちの暴力によって阻止・延期されるという状況を目の当たりにして、終戦以来15年、曲がりなりにも機能してきた戦後日本の政治構造が今にも崩壊するのではないかという、いわば「一触即発」の危機を感じた人も多かった。

保守対革新の対立はもとより、同じ革新陣営に属する国会議員や労働組合指導者の間でも国の将来についての考え方が違い、それぞれが外部で吹き荒れている大衆運動の圧力に巻き込まれ、通常の話や冷静な議論ができない状態にあった。そうした中で数多くの国会議員や組合指導者が、朝に夕にMRAハウスを訪れ、胸襟を開いて事態を判断し、共通の目標のもとに当面の対策を考えようと努力する姿があった。保守党の有力者と社会党の議員、西尾末広党首をふくむ民主社会党の有力者と労組指導者連などが、朝食や夕食の食卓を囲み、連日真剣な討議が続けられた。

しかし事態は日を追ってエスカレートし、アイゼンハワー大統領の訪日が直前になって中止され、一人の女子学生がデモ隊と警官隊の衝突の中で死亡するなど深刻な様相を呈しはじめると、それまで静観してきた国民の間にも、異様な危機感が広がるようになった。そして6月17日、朝日、読売、毎日の3大全国紙の朝刊に、加藤シヅエ参議院議員が、自らの所属する社会党に宛てて書いた次のような公開書簡が掲載された。

反響は極めて大きく、全国の読者が、それぞれの立場を越えてその主張に賛同すると共に、加藤議員の並々ならぬ勇気に対する敬意と賞賛を表明した。社会党は党の方針を反するこの主張に困惑し、懲罰動議なども検討されたが、日が経つに連れて世論の広がりに押され、党の態度も微妙に変わり始めた。

客観情勢も変わり始めた。「60年安保」を支えてきた闘争のエネルギーにも金属疲労が見え始め、岸首相の退陣がそれに拍車をかけた。加藤書簡を契機の一つとして、長期の対立に倦み、変化を求めている国民の間にも新しい意識が生まれ始めた。そして低姿勢と所得倍増を掲げる池田内閣の登場と共に、日本は闘争の季節を脱却し、高度成長という新しい局面に入ることとなった。



【六月十七日附朝日新聞「声欄」】

勇気をもつて立ちあがろう

加藤 シヅ エ

六月十五日の全学連の暴行は、日本人の心をしんがいでいさせずにはおかなかつた。わたしは、テレビでその経過を見ながら、この国の将来を考えて、胸もつづれる思いであつた。

この期におよんで、警察がやりすぎたとか、政府の責任であるとかいふのはとんでもない見当ちがいである。これは、一部の破壊的イデオロギーによつて動かされる少数者が、暴力をもつて政府を転覆しようとする、きわめて危険な意図にやるものである。

わたしは、社会党員としてすでに十年以上、国会に籍をおくものであるが、日本の民主主義がこのような暴行によつて破壊の危機にさらされるようになった

とを、深く恥じるものである。

また、わたしはこの数週間、自分のおく病きのゆえに、心に正しいと思つたことをはつきりと表現しなかつたことを国民の前に陳謝したい。両院議員総会などでも間違つた決定がなされても、黙つても聞きすごしていた。また、正しいことを勇気をもつて発言するものがいても、立ちあがつてこれを支持することをしなかつた。他人の思惑、党内の批判を恐れる心のゆえであつた。

しかし、いま、わたしは、日本を共産主義から守り、正しい民主主義を打ち立てるために、全面的に戦うことを誓うものである。

五月十九日以来、日本は共産主義と民

主主義の決戦場と化した。共産主義は、中共その他の積極的な支援のもとに人民戦線を結成しその圧力をもつて、内閣を破壊しようとする努力し、さらに、反米暴動を誘発して、日米の離間を策している。安保条約改定の可否などは、すでに問題の焦点をはるかに離れてしまつてゐる。

真の問題は、いつたいわれわれは、われわれ自身のために、また子どもたちのために、どのようなイデオロギーのもとに日本を作ろうとしてゐるのか、である。

日本は、米國に追随すべき国でないことは、もちろんである。しかし同時に、中共やソ連の圧力によつて支配されるべき国でもない。

もし、われわれがいま、勇気をもつて立ちあがり、心に思つてゐる真実をはつきりと口にし戦う決意をするならば、まだわれわれは、日本およびアジアを救うことができる、信ずるものである。

全世界を席卷した劇「タイガー」

昭和35年(1960)7月、広島選出衆議院議員谷川和穂、参議院議員近藤鶴代、国労九州地評議長太田末男、都教組の前書記長神部英雄、三井造船、東洋工業等の労組役員等総勢60名のグループが羽田空港を出発してスイスのコーに向かった。その中に、後に劇「タイガー」の中核となる学生の一行の姿もあった。



アイゼンハワー前大統領を訪問 1961年3月

「60年安保」を巡っての対立抗争が、岸首相の退陣、池田首相の就任を機に急速に沈静化し、一種の空白状態に陥っていた日本も、脱イデオロギー的な高度成長に向かって、ようやくその一步を進めようとしていた。しかしほんの数週間前まで日本の政治情勢は、世界の注目の的になっていたため、到着した日本人は、それぞれの立場に応じて質問的となった。学生のグループは、実際の闘争に参加していたもの、いなかったものと多様

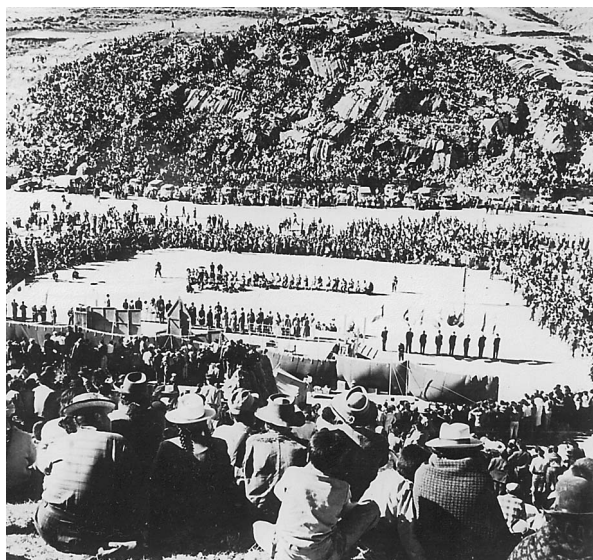


ブラジル タボラ元帥と一行

だったが、「全学連」という名前が世界を揺るがしてきた事実を知ることにつけて、敗戦後15年、突然のように燃え上がったあの激動は何かだったのかについて、改めて考え直す機会を持つこととなった。

その結果、コーの静謐な環境の中で、数名の学生が中心となって書き下ろし、専門家の支援も得て演

出したのが劇「タイガー」であった。当初はたまたまコーに集まっていた多くの国々の人々に、「60年安保」の背景を、劇の形で説明しようという程度の意識で、自民党の国会議員や、全学連とは全く関係のない労組出身者なども参加し、マウンテン・ハウス内の舞台上演したものであった。ところがその結果は予想を遙かに上回る反響を巻き起こし、8月にコーを出発、2年後の昭和37年6月末に帰国するまでの間、ヨーロッパ、北米、南米、キプロス、インド、ベトナム、台湾など13カ国と、文字通り世界を席卷し、推定観客数も2,000万人に上るといふ、空前の大企画に発展することとなったのである。参加者自身にも信じられなかったほどのこうした経緯とその詳細については、相馬不二子著「虎世界をゆく」(文教書院刊)に詳しい。



アンデス インカ帝国サクサファマン城塞に集まった40,000人のインディアンに現地語のケチュア語で上演



ペルー東部アマゾン源流イキトスの観客

旅程「虎世界をゆく」より

旅程

(訪問国13カ国)

年月日	訪問国	おもな行動経路
1960. 7. 7		東京羽田発
7. 7	スイス	コー着
7. 28		コー発
8. 28	ドイツ	エッセン着—ギルゼン—キルヘン—ラインハウゼン—ドルトモンド—ポッフム—オウグスドルフ—ベルリン—デュッセルドルフ—ウッパタール—マンハイム—シュトゥツガルト—バインハイム—コブレンツ—マリアラック—パットゴ—タスパーゲ—ボン
12. 21	スイス	コー着
1961. 1. 25		コー発
1. 25	フランス	パリ着
2. 14		パリ発
2. 14	アメリカ	ニューヨーク着—ワシントン—デトロイト—ロスアンゼルス—マイアミ
4. 27		マイアミ発
4. 27	ブラジル	サンパウロ着—リオデジャネイロ—ブラジリア—ニテロイ—ペトロポリス—レシフェ—カンピノグランデ—ジョアペソア—ナタール—フォルタレザ—ペレン—マナウス
7. 28	ペルー	イキトス—ピウラー—タララー—チクライヨ—ートルヒーヨ—リマ—クスコ—プーノ
10. 8	ボリビア	ラパス—アルチプラノーティ—ワナコーカ—タビー—オルル
10. 28	チリー	マリアエレナ—アントファガスター—サンチャゴ
11. 30	ブラジル	リオデジャネイロ—ペトロポリス—サンパウロ—サントス
1962. 2. 1		サンパウロ発
2. 1	スイス	コー着
2. 17		コー発
2. 17	キプロス	ニコシヤ—ラナカー—レフカー—パポス—ファマグスター—サラミス—リマソル
3. 2	インド	カルカッタ着
3. 29		カルカッタ発
3. 29	東パキスタン	ダッカ着—チタゴン
5. 8	ベトナム	サイゴン—ナトラン—クインノン—フェーダラット—サイゴン—ヴィエンホア—ウィンロング—サイゴン
6. 8	台湾	高雄—台北—金門島—台北
6. 26		羽田着



ペルー・リマ スタジアムで上演



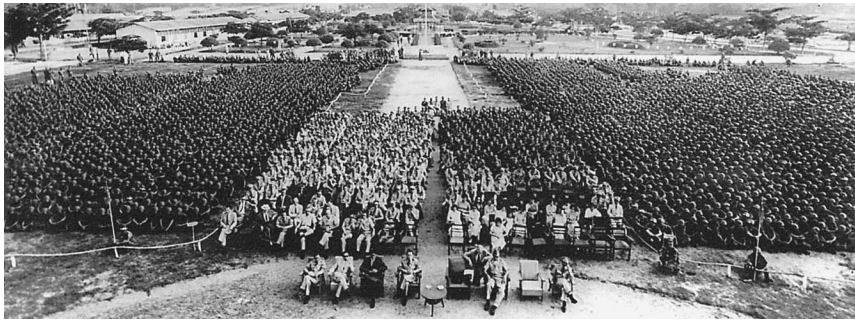
「タイガー」一行を迎える
マカリオス キプロス大統領



ゴ・ディン・ディエム
南ベトナム大統領を表敬訪問



ベトナム 激戦地ビンロンに向う一行



ベトナム軍将兵に上演



全学連を先頭に
国会周辺をデモ
するシーン

センター開設後の活動

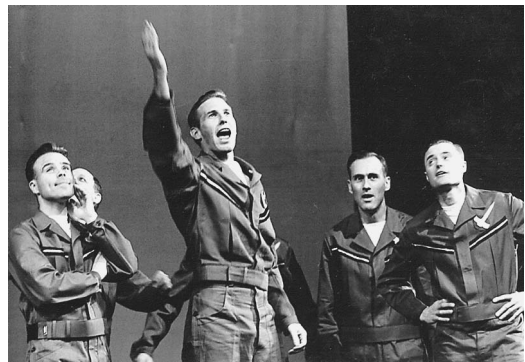
第一回小田原世界大会と音楽劇「宇宙は素晴らしい」
昭和37年(1962)10月22日の開所式に続き、センターの
完成を記念して開催した第一回世界大会は、数百名の参加
者を得て盛大なイベントとなった。これに合わせて作詞、
作曲、制作された音楽劇「宇宙は素晴らしい」(ピーター・
ハワード原作)が100名を超える出演者と共に来日し、東
京文化会館で記念公演を行い、その後札幌、大阪など各地
で上演した。一方2年以上の海外活動を終わって帰国した
劇「タイガー」が小田原市民会館で上演された。



「宇宙は素晴らしい」の一場面
夢が本当になるだろう...



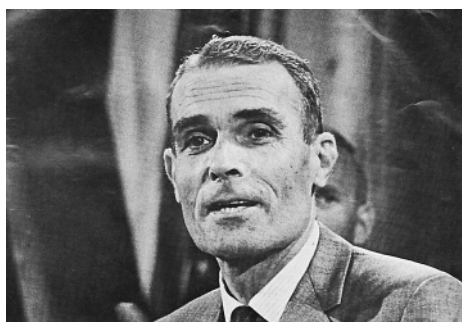
「宇宙は素晴らしい」の一場面
争い悲惨をとりのぞき 人の恐れをときはなち
神は世界に融合を



「宇宙は素晴らしい」の一場面
一番乗りだよ月に着かなきゃ爆発さ

第二回小田原世界大会と劇「共産主義を越えて革命へ」

昭和38年(1963)4月には内外から多数の参加者を得て、第二回の世界大会を開催した。これを機会にブックマン博士の死後、世界のMRA活動を指導することとなったピーター・ハワード氏が来日し、早稲田大学の「小野梓講堂」で「共産主義を越えて革命へ」と題して講演を行った。「60年安保」の後遺症が色濃く残っている中で、精神的改革を前提とした



ピーター・ハワード

世界再造への道筋を示す先見的な講演で、当時アジアセンターの大会に参加していた学生達が、そのテーマを軸とする音楽劇「共産主義を越えて革命へ」(原作・木村吉紀)を書き、アジアセンターの施設を利用して演出、制作を進めた。



「共産主義を越えて革命へ」一場面

この劇は6月大和証券ホール(東京)での公演を皮切りに、九州、四国、山陰、近畿、東海、関東、北海道など、各都市の劇場や大学、各地の自衛隊駐屯地での上演が続いた。東京から北海道への移動には自衛隊の輸送機が提供され、厳寒の中を全道の自衛隊基地の大半で上演した。この間同年11月から2ヶ月間はインド各地を巡演するなど大きな成果をあげた。

各地の高校生を対象とする活動のひろがり

昭和39年(1964)には、札幌での「共産主義を越えて革命へ」の公演に触発された香蘭女子高校を中心とする高校生のグループが、彼ら自身の体験をベースに「光は北方から」、翌年には「北極星」という二つの音楽劇を制作し、全道各地はもとより小田原、東京でも上演した。一方当時北海道大学の学生で、過激な行動を指



北海道のパレード

向していた木本長(つかさ)の原作による劇「明日では遅すぎる」が生まれ、日本におけるMRA活動も、演劇映画を多用して普及に努めるようになった。なお「北極星」は札幌テレビで全道に放映された。地元小田原でも高校生による「十代の爆発」という劇が作られた。

昭和40年(1965)夏にはこれらの劇を中心とする高校生(18名)、大学生(25名)に韓国の大学生8名が加わって、約100名の代表がマキノ島の世界大会に参加した。「北極星」はマキノやチャールストン、サンタフェなどで上演され好評を博した。「明日では遅すぎる」はマキノで映画が制作された。



「十代の爆発」小田原の高校生



アメリカを旅行する一行（1965 夏）



西バージニア州議事堂訪問の一行（1965 夏）



ニューメキシコ「北極星」を見にきた
インディアン保護区の観客

「シング・アウト65」(米国)の来日

昭和40年(1965)夏のマキノ島のMRA大会では、アメリカの青年を中心として「シング・アウト65」という新しいタイプのショウが制作された。当時流行のフーテナニーやグループ・サウンズのアイデアを取り入れ、非常に多くの青年が舞台に参加し、「神様の(皮膚の)色は何色か?」(What Color Is God's Skin?)「ジャンヌダルク」(Joan of Arc)、「自由はただでは得られない」(Freedom Is Not Free)「アメリカの選択」(Which Way, America)など、当時のアメリカが抱えていた諸問題に直截に立ち向かおうとする数々の歌が、感動的な舞台を盛り上げた。「私のウィリー」(Bring Back Willie To Me)など、ベトナム戦争の悲しみを歌い上げたフォークソングもあれば、フィナーレには「Up With People」という人間讃歌とも言うべき大型の曲を配し、内容的にも完成度が高く、将来性を持つ作品となった。ウッドストックのイベント等に見られるように、全く新しい音楽的表現が、世界的に人気を呼んでいたときでもあり、「シング・アウト65」は、参加を希望する青年男女が殺到し、関係者の予想を超える反響を巻き起こした。



佐藤首相とキャスト



船田衆議院議長とキャスト



東京都体育館での公演



上智大学での公演

この大会には日本から小田原の鈴木市長、電源開発の藤井総裁などとともに、多くの高校生や大学生が参加していたが、新しい時代を先取りするようなこのショーに強い印象を受け、即刻日本に招待することが決まった。同年9月には150名余りに上るグループがチャーター機で来日、かなり異例ではあったが北海道の千歳空港から入国し、中島スポーツ・センターで公演した。ついで東京に移り、歌舞伎座、東京体育館、早稲田大学大隈講堂、日大講堂（旧国技館）などで上演、大きな反響を呼んだ。東京体育館には7,500名の観客が集まり、佐藤首相夫妻も観劇し、終演後舞台裏で出演者を慰労した。また大隈講堂では坂本九が特別出演した。因みに佐藤首相から特に寄付されたグランド・ピアノは、定期的なメンテナンスを続け、現在もアジアセンターで活躍している。



早稲田大学大隈講堂 特別出演坂本九

第三回小田原世界大会と「シング・アウト65」韓国公演

アジアセンターでは、米国から「シング・アウト65」を迎えて、10月10日から17日まで第三回世界大会を開催し、アメリカ、韓国、ベトナム、英国、フランス、カナダ、インド、セイロン、オーストラリアなど25カ国から延べ2,000名余りが参加し、市民会館での公演も行われた。

「シング・アウト 65」は、御殿場の自衛隊富士学校などを訪問、大会終了後さらに関西に移動し、神戸中央体育館での公演では5,000名の観客を集めた。その後グループは、韓国の丁一権首相の招待に応え、小倉からフェリーに乗船して韓国に向かった。これに伴いMRA世界大会も、小田原からソウルに場所を移して、10月20日から24日まで続行され、韓国各地から1,450名が参加した。丁首相臨席のもとで行われたソウルでの「シング・アウト65」の公演には2,100名が集まり、入れない人が500名に上った。



ソウルでの大会でシング・アウト65に拍手をおくる
丁一権韓国首相と家族、左はブラウン駐韓米国大使

「レッツ・ゴー66」と武道館公演



吉永小百合ショウに出演した「レッツゴー66」(NTV)

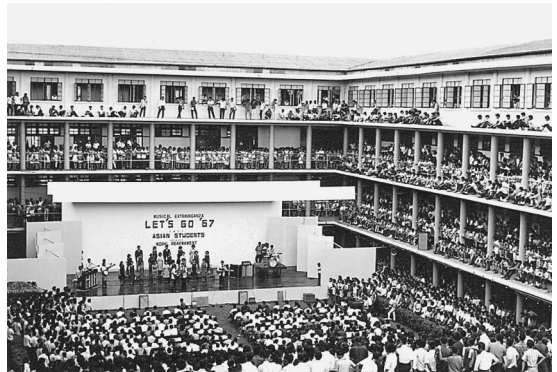
「シング・アウト65」の斬新な形式と、未来志向のメッセージが、日本及び韓国の青年達にひろく受け入れられ、日本では「レッツ・ゴー」というショウが生まれ、国内各地は勿論、翌昭和41年(1966)には韓国、香港、フィリピン等をはじめ東南アジア7カ国を訪問、各地で好評を博しただけでなく、地元の青年達により、それぞれの

バージョンによるその国に特有のシング・アウトが作られ、地域全体を活動の場とする新しい形でのMRAの活動が展開された。41年(1966)12月には、前年9月以降、革命の先頭に立って、軍と共に活動していたKAMI(インドネシア学生連盟)からの招待を受

け、米国シング・アウトのメンバーの一部との混成グループを結成してインドネシアを訪問し、3週間に亘ってジャカルタ、バンドンなどで、軍と学生を中心に、数万人の観客を集めて公演を行った。たまたまスカルノ大統領から、スハルト次期大統領への権力委譲の時期で、国内が騒然としていた中での上演は非常に印象的だった。



マルコス大統領を表敬訪問



マニラ公演



インドネシア空軍機でバンドンに到着した一行



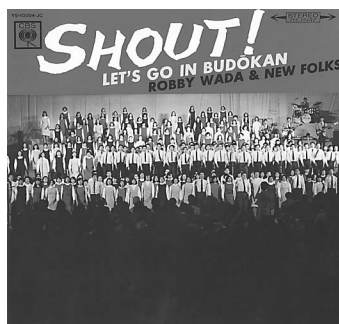
ジャカルタ公演

東京では、新宿厚生年金会館、渋谷公会堂での公演やテレビにも出演し、また高校や大学の学園祭にも招待されるなど、若者の心を捉え参加者が増え続けた。

昭和41年(1966)11月には「レッツ・ゴー66」が、500名を越えるキャストによる超大型のショーとして武道館で上演され、1万人以上の観客を集めて人々を驚かせた。



武道館公演



レコードジャケット

MRA 移動学校

当時はこうした形式のプロダクションへの人気と要望は高まるばかりで、継続的に参加を望む高校生が多くなったので、勉強と音楽活動を両立させるという観点から、昭和42年(1967)4月には、アジアセンターを拠点として、NHK学園の協力の下に「MRA移動学校」が設立された。国内・国外に移動中もビデオや音声テープによって勉強を続けることのできるシステムで、4年間に67名の生徒が参加した。こうした集団的な音楽の普及に応じてNHKが計画した「音楽の花開く」という番組への出演の依頼も受け、移動学校生徒も参加し、数ヶ月連続出演した。(詳しい活動については、CD-ROM「MRA 国際移動学校公式記録」(1967年4月～1970年3月)が制作されている。)



開校式で祝辞を述べる
平塚益徳国立教育研究所長



NHK「音楽の花開く」に出演



国内を移動する生徒



学校案内（1968年MRA
国際移動学校と改称）



ビデオ授業

「シング・アウト・アジア」米国公演

昭和43年(1968)7月には、移動学校生徒、並びに韓国、タイ、香港、フィリピンなどからの参加者を含む約150名のグループが「シング・アウト・アジア」を結成し、アジアセンターの大ホールを使って演出・制作した上、パンアメリカン航空のDC8型機をチャーターして米国での公演に出発した。10月の帰国まで約3ヶ月間、西海岸のサンディエゴを皮切りに中西部、東部各州を巡演、22州、35都市を訪問、上演した。全米各地で非常な評判となり、大型バス4台、トラック2台を連ねて大陸を往復横断し、各都市で上演の際は全員民宿する一方、日本で原盤を制作したLPレコード4万枚余りを完売し、往復の航空機代、運送費など諸経費の大半を賄うことができた。こうした成果の背景には輸送から劇場、舞台・音響設備の設置、各地での民宿のアレンジなど、アメリカのMRA関係者による広範な支援があった。



シング・アウト・アジアの舞台より



ワシントン国会議事堂を訪問した シング・アウト・アジア行

「涙をこえて」とNHK「ステージ101」

シング・アウトの評判が上がり、上演の要請が増えるのに対応し、大学生、社会人、外国人などによる半ばプロフェッショナルなグループを結成し、各地で上演した。昭和44年7月25日には、三重県の合歓の里におけるヤマハの「第一回ポピュラー・フェスティバル」に参加し、中村八大作曲による「涙をこえて」を唱ってグランプリを受賞し、11月にはRCAがこの曲のレコードを全国販売した。なおこのグループは昭和45年(1970)1月からは、「音楽の花開く」に次ぐ新しい番組としてNHKが企画した「ステージ101」にも出演することとなった。



レコードジャケット

日本外語教育研究所 (Language Institute of Japan-LIOJ)

昭和43年(1968) アジアセンターの宿泊施設を活用して日本外語教育研究所(Language Institute of Japan-LIOJ)が発足した。当初は海外留学を希望する学生を対象に、短期間で効果的な英語教育を提供する事を目的として、マキノ大学の学生を中心に、アメリカやカナダから若い男女を招き、数週間から数ヶ月



戦前戦後を通じて日本のMRA活動を推進し、LIOJを設立した
ローランド・ハーカー初代校長とテルツ夫人

月の宿泊付きのコースを運営したが、やがて企業人や英語教師からも同様のプログラムへの要望が大きくなったので、ローランド・ハーカー校長夫妻を中心として、語学教育の専門的訓練を受けた教員(アメリカ人、英国人、オーストラリア人等)を招聘し、より高度で効果的な語学教育を指向することとなった。

昭和44年(1969)夏には全国英語教員のためのワークショップを提供し、翌昭和45年(1970)には企業人向けの、1ヶ月の宿泊を含む特訓コースを開始した。たまたま日本企業の海外進出が本格化し始めた時期だったので、多くの一流企業から参加希望が殺到し、毎月多数のキャンセル待ちが出るなど、このコースは非常な盛況を見せ、受講者数は延べ4,771名に達しアジアセンターの収益にも寄与した。

一方教員向けワークショップは平成14年(2002)夏、34回目を迎え、全国各都道府県をはじめ、韓国、ロシア、タイ、ベトナム、ビルマ等からの招聘者を含め71名の参加を得て、例年を上回る成果を上げた。各地から毎年継続的に参加される教員もあり、過去34年の参加者の人数は延べ4,052名、海外からの受講者も165名に上った。



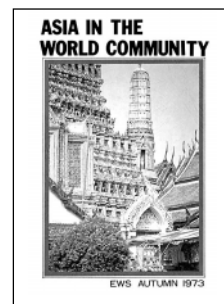
LIOJ サマー ワークショップ 2002

発足以来現在までにLIOJが招聘した教員は米国、英国、豪州、ニュージーランド、韓国、アイルランド、ハンガリー、ドイツなどから延べ336名、英語教育者のためのワークショップには全世界から一流の言語学者、教育専門家多数が特別講師として参加した。また、1993年から1999年まで、タイ国 Srinakharinwirot 大学との提携により、日本とタイ国の双方で英語教師のチームティーチング交換プログラムを実施し、計36名が参加した。このほか地域住民を対象として昭和46年(1971)に開始した通学コースも、小中学生から婦人・社会人など、参加者の合計は平成14年(2002)現在18,510名となっている。最近では高校生の泊まり込みコースや、箱根町その他近隣地域の公立学校でのチーム・ティーチング・プログラムも展開している。

東南アジア諸国との知的交流(イースト・ウェスト・セミナー)

アジアセンターの収支改善に伴い、昭和45年(1970)以降は、アジア各国との交流の強化に努めた。昭和46年(1971)には東南アジアとの知的交流を主たる目的として「イースト・ウェスト・セミナー」を発足させ、昭和48年(1973)にはタイをはじめ東南アジア各国で日貨排斥運動が拡大しつつある状況に鑑み、バンコクのチュラロンコン大学との共同主催

で「世界の中のアジア」というテーマで、国際セミナーを開き、結果を「東南アジアの日本批判」(サイマル出版会)という本にまとめた。また昭和50年(1975)には、同じくチュラロンコン大学で、アセアンの問題に関するシンポジウムを開き、結果はテキサス大学出版部による「アセアン 変わりゆく世界における問題と可能性」という報告書に結実した。



東南アジアとの関係はその後更に発展し、昭和52年(1977)には「日本を見つめる東南アジア」、昭和54年(1979)には「真実のインドネシア」、昭和56年(1981)には「東南アジア5つの国」を出版する一方、昭和53年(1978)以降、日本国際交流センター(JCIE)との共同主催により「アジア・ダイアログ」シンポジウムを数年間継続して開催、昭和54年(1979)以降は、同じくJCIEとの共催で、「日本・タイ国セミナー」を数回に亘って開催した。



チュラロンコン大学 国際セミナー

各種助成事業

昭和50年(1975)以降、「日本・北スマトラ友好基金」およびアジア・コミュニティ・トラスト(ACT)の設立、京都大学豊長類研究所のインドネシアプロジェクトの支援、タイのタマサート大学経済学部への奨学金など、小規模ながら東南アジアを対象とする助成活動を開始した。バブル崩壊後は低金利のため規模は縮小を余儀なくされたが、幾つかの案件

については引き続き支援を続けている。一方国内では(社)国際MRA日本協会の設立時(1984年)には基金を拠出し、以後運営費の助成を行っている。また、日本国際交流センター(JCIE)、国際協力NGOセンター(JANIC)、アルカンシエール美術財団、ジャパン・リターン・プログラム、北海道国際農業交流協会、アジア・ユース・フォーラム、国際環境生物地球化学シンポジウム、ミャンマー交流プログラム(GYU)などのプロジェクトへの援助を続けている。

オフ・キャンパス・アクティビティーズ(OCA)

助成事業の中で規模と内容の両面で特に重要なのは昭和47年(1972)、タイと日本の学生や青年を対象とする交流の拡大を目指して発足した「オフ・キャンパス・アクティビティーズ」(代表 相馬豊胤)である。チュラロンコン大学経済学部を拠点の一つとして展開してきたその事業は、埼玉大学経済学部、名古屋大学大学院国際開発研究所、金沢大学、学習院大学経済学部、慶応大学商学部、熊本県立大学総合管理学部などとの、大学間ならびに学生間交流や共同研修などを中心として多岐に亘っている。チュラロンコン大学からは獣医学部の学生が継続的に日本での研修プロジェクトに参加し、東京では日本獣医師学会や日大農学部等を訪問後、宮崎大学農学部で約20日間に亘って各種実習に参加してきた。OCAによる日タイ青年交流事業は、発足以来30年を越え、タイ国から参加した学生は950名を越えた。



タイ王国マハーチャクリ・シリントーン王女殿下、
学習院大学経営学名誉博士号贈呈式
平成13年9月19日 右は小倉学長



チュラロンコン大学を訪問した
名古屋大学の学生(1993年10月)

平成13年(2001)には長らく懸案とされていたマハーチャクリ・シリントーン王女に対する学習院大学の経営学名誉博士号贈呈が、OCAの斡旋によって実現した。この年9月17日に来日された王女は、18日、天皇ご夫妻との夕食会の後、19日に学習院大学を訪問、院長主催昼食会、名誉博士号授与式、特別講演の後、成田より帰国された。シリントーン王女は、タイの王族の中でもその知性と品性の高さから、国民の間でも非常に人気のある王女として内外に広く知られている。

建物の改修と「アジアセンター ODAWARA」の発足

昭和37年(1962)の開所後30年を経て設備の老朽化が目立ってきたこともあり、平成5年(1993)10億円近くを投資して建物のリニューアルを行った。宿泊室の全面的な改修、「カフェ・アルカンタラ」「あけぼの」等の新設、事務所、調理施設等の改装など広範な工事を行い、名称も「アジアセンター ODAWARA」と改め、平成5年4月、小沢市長ほかの臨席を得て式典を行い、地域のゲストハウス兼セミナーセンターとして再開した。同年7月には工事の完了を記念して「地域がつなぐアジアと日本」と題して大型の国際シンポジウムを開催し、各種NGOや国際支援活動の現状と将来の方向について、海外及び各方面から36名に上る参加者を得て活発な討議を行った。



公開シンポジウム「地域がつなぐアジアと日本」



基調講演を行う嶋信彦氏



リニューアル「研修室」



リニューアル「あけぼの」



リニューアル ロビー



リニューアル 客室



リニューアル
レストラン「アルカンタラ」

略 年 表

大正 10 年(1921)	フランク・ブックマン博士、オックスフォード大学を中心に活動を開始(オックスフォード・グループと通称された。)
昭和 13 年(1938) 5 月	ロンドンで M R A (Moral Re-Armament) 「 道徳再武装 」 を提唱
23 年(1948) 6 月	ロス M R A 会議に堀内謙介、三井高維夫妻、相馬恵胤夫妻他 3 名参加
24 年(1949) 6 月	コ - M R A 大会に片山哲夫妻、毎日新聞 高橋編集長、藤本外信部長参加
25 年(1950) 6 月	コ - M R A 大会に 6 0 名参加、その後一行はヨ - ロッパ、アメリカを訪問
26 年(1951) 6 月	アメリカ マキノ島 M R A 大会に 4 7 名参加
27 年(1952) 3 月	財団法人 M R A ハウス設立、代表者 三井 高維
4 月	港区麻布富士見町(現 港区南麻布)に本部を設置
6 月	マキノ島 M R A 大会に 2 4 名参加
28 年(1953) 8 月	コ - M R A 大会に 1 6 名参加、その後一行はヨ - ロッパを訪問
30 年(1955) 6 月	音楽劇「消えゆく島」を中心とする国際代表団来日
31 年(1956) 5 月	創始者フランク・ブックマン博士来日に際し日本政府より勳二等旭日章を受章
32 年(1957) 3 月	フィリピン M R A バギオ大会
5 月	日本青年団協議会代表 1 0 0 名米国 M R A 会議に参加
33 年(1958) 5 月	第 2 次日本青年団協議会代表ら 7 0 名米国 M R A 会議に参加
34 年(1959) 5 月	大津 M R A アジア会議開催
9 月	社会党関係者訪欧
35 年(1960) 3 月	ドイツルール地区炭坑夫による劇「ホフヌング(希望)」来日
8 月	日本人学生による劇「タイガー」を持ってヨーロッパ、南北アメリカ、アジアの 2 2 ヶ国を 2 年間にわたって歴訪
36 年(1961) 4 月	M R A アジアセンター建設後援会を設立、理事長 工藤 昭四郎
37 年(1962) 10 月	M R A アジアセンター開所(神奈川県小田原市)
38 年(1963) 11 月	音楽劇「共産主義を越えて革命へ」インド訪問

- 39年(1964) 10月 東京オリンピック 各国選手をMRAハウスおよびアジアセンターに招待
- 40年(1965) 7月 音楽劇「北極星」を中心とする青年100名訪米
9月 米国を中心とする「SING OUT 65」の青年100名来日
- 41年(1966) 12月 日本、韓国、台湾、比国、香港、ベトナム、タイの青年による「レッゴー'66」が東南アジア7ヶ国を歴訪
- 42年(1967) 4月 MRA移動学校設立
- 43年(1968) 3月 「LANGUAGE INSTITUTE OF JAPAN (LIOJ)」(日本外語教育研究所)を設立
7月 アジア5ヶ国150名の青年による「SING OUT ASIA」米国22州35都市を歴訪
- 44年(1969) 4月 港区南麻布に本部を新築
8月 LIOJ英語教育者向け夏期ワークショップ新設(毎年夏開講)
- 45年(1970) 3月 LIOJ企業人向け英語合宿集中課程を新設
- 46年(1971) 10月 東西文化の交流を目的として「EWS(イーストウエストセミナー)」発足
- 48年(1973) 6月 タイ・バンコクにおいてシンポジウム「世界の中のアジア」を開催
- 49年(1974) 2月 サイマル出版会より「東南アジアの日本批判」を出版
- 50年(1975) 12月 タイ・バンコクにおいてシンポジウム「アセアン - 変わりゆく世界における問題と可能性」を開催
- 52年(1977) 2月 サイマル出版会より「日本をみつめる東南アジア」を出版
11月 アジアセンターにおいて第1回「アジアダイアログ(シンポジウム)」を開催
- 53年(1978) 3月 「北スマトラ・日本・インドネシア友好基金」設立に参画
9月 タイ・バンコクにおいて第2回「アジアダイアログ(シンポジウム)」を開催
- 54年(1979) 3月 アジアセンターにおいて第3回「アジアダイアログ(シンポジウム)」を開催
5月 サイマル出版会より「真実のインドネシア」(翻訳)を出版

- 54年(1979) 11月 公益信託「アジア・コミュニティ・トラスト」(ACT)設立に参画
12月 国際文化会館において「日本・タイ国セミナー」を開催
- 56年(1981) 6月 サイマル出版会より「東南アジア・5つの国」(翻訳)を出版
- 57年(1982) 5月 アジアセンター食堂および厨房改装工事実施
- 59年(1984) 9月 英国クルーム・ヘルム出版社より「JAPAN AND THE ASIAN PACIFIC REGION」を出版
- 60年(1985) 1月 サイマル出版会より上記翻訳版「日本はアジアか」を出版
- 61年(1986) 12月 アジアセンターにゲストハウスを新築
- 平成 1年(1989) 3月 アジアセンター箱根棟改修工事実施
3月 渋沢敬三記念基金発足
9月 アジアセンターに東館を新築
- 3年(1991) 3月 アジアセンター4、5階改修工事実施
9月 英国ラウトレッジ出版社より「PACIFIC ASIA IN THE 1990s」を出版
- 5年(1993) 3月 アジアセンター本館(B1～3F)改修工事実施
4月 アジアセンター名称変更、新名称「アジアセンターODAWARA」スタート
7月 アジアセンター - ODAWARAにおいて国際シンポジウム「地域がつなぐアジアと日本」を開催(日本国際交流センター - 共催)
- 6年(1994) 10月 アジアセンター - ODAWARAにおいて国際ダイアローグ「平和の受益者から平和の創造者へ」を開催(国際MRA日本協会、総合研究開発機構共催)
- 10年(1998) 8月 L I O J設立30周年記念シンポジウム「アジアと日本の英語教育について」を開催、記念誌「Perspective on Secondary School EFL Education」を出版
- 13年(2001) 4月 アジアセンター ODAWARA 大浴室新設
- 14年(2002) 10月 記念誌「アジアセンターODAWARA 40周年記念 戦後の日本とMRAの軌跡」とCD-ROMを制作

戦前の MRA と日本での活動

創始者ブックマン博士 (Frank N. D. Buchman) は米国、ペンシルバニア州のアレンタウンという町の出身である。この地域にはペンシルバニア・ダッチと呼ばれ、代々深い信仰心を持った人々の集団が、ヨ - ロッパから移民して以来居住していると言われている。本来スイス系と伝えられるブックマン博士の家族 (祖先の故地は東部のサンガレン付近) もそうしたグループに属し、博士自身もルーテル派教会に所属、孤児院の運営等社会運動に従事していたが、経営陣との間に軋轢を起こし、第一次大戦後、煩悶を抱えたまま英国に渡った。イングランド北部のレーク・ディストリクトという風光明媚な地にある、ケスウィックという町に滞在中、精神的啓示を体験し、それをもとに教宣活動を開始した。賛同した学生青年達と共に、生活改変の契機として正直、純潔、無私、愛の4つの絶対道義標準を提唱、これを基盤として地域や世界情勢の変革を志す人々の活躍が、英国を中心として西欧各国、南アなどに拡大していった。当初の賛同者にオクスフォード大学の学生や教員が多かったことから、世上ではオクスフォード・グループと通称された。

たまたま第一次世界大戦後の西欧には精神的空白や絶望が蔓延していたので、グループはこれに応えるため、西欧各国で種々のプログラムを展開していた。1930年代に入り、ナチス・ドイツの台頭、ロシアを皮切りとする共産主義革命の普及などに直面してからは、著書「世界を再造する」(Remaking the World)に盛られた理念を掲げて全世界を対象とする運動に昇華し、昭和13年(1938) ロンドン東部のイーストハム地区の公会堂での講演で、「道徳再武装」(Moral Re-Armament)を提唱した。MRAという言葉の語源は、そのときの講演の中で「今後は軍備の拡大ではなく、精神的道義的に再武装



戦前オクスフォード大学でブックマン博士に出会い戦後 MRA ハウスの設立等活動を指導した三井高維夫妻

された人々によって新しい世界を作らなければならない」と言った博士自身の言葉に基づいたものである。以来MRAは、それまでのオクスフォード・グループという比較的宗教色の濃い運動から変貌し、世界全体を視野に入れた独特の精神的思想的活動を展開することとなった。

日本にもそれ以前からオクスフォード・グループに賛同する人々があり、「**改变生活**」という標題の雑誌を発行し、各地で定期的に会合を持つなど活発な活動が行われ、宗教的体験の普及を軸としてかなりの成果を上げていたように見える。「**改变生活**」への投稿者の中には、賀川豊彦、山根可弑、高原義男等の名前がしばしば登場している。

昭和13年(1938)以降、オクスフォード・グループの変容とMRAの発足等新しい状況が日本にも逐一伝えられ、日本人支援者の間でも、ブックマン博士にならって全世界を視野に入れ、世界の再造を目指そうとする考え方が理解され始め、「**改变生活**」の記事のトーンも変わり始めた。



改变生活
昭和13年10月号表紙

昭和14年(1939)にはブックマン博士の意を受けてローランド・ハーカーというアメリカ人が来日し、青山学院、旧制第一高等学校等で教鞭を執る傍ら、日本でのMRAの活動を支援した。しかし昭和16年(1941)真珠湾攻撃により日米両国が戦争状態に入ると、ハーカー氏は強制送還され、日本での運動も事実上中断することとなった。



岐阜での全日本オクスフォードグループ集会 昭和 13 年 8 月 24 日

ブックマン博士・人と業績

プロフィール

眼鏡の奥で微笑んでいる瞳は、暖かいけれど相手を射抜くような力を持っている。どこのどんな人に対しても、ブックマン博士は、80才の老人とは思えない、びっくりするほど柔らかい手をのばし、心をこめて、握手してくれる。

多くの人にとって、ブックマン博士は、それまで見たことのないタイプの人物だったに違いない。心の温かい、不思議な人であり、そばにいと否応なく不安を感じさせられる人でもあった。自分が本来すべきことをしていないという事実を、何となく、しかも強く感じさせられてしまう。何か特別の、非常に大きくて大事なことに命を懸けている人だということが、言葉の端々や、なにげない態度や動作から明らかに見て取れる。そしてそのことが、現在の自分のいい加減な生活をあぶり出し、不安にさせられるようだった。



ブックマン博士

とはいっても、政治家や企業家、芸術家など、いわゆる偉い人たちとは違い、ブックマン博士の醸し出す雰囲気は優れて「非地上的」であり、その信念の正しさを疑うことは難しい。しばらく目を見合わせているだけで、自ずと自分の良心との対決を迫られる。

博士との出会いで、人生全体を揺さぶられるようなインパクトを受けた人は多い。それまでの自分の生き方、家庭や社会との関わり方等が突然新しい光に照らし出されて、まったく違ったものに見えてくる。与えられたものとして安心し、諦めてもきた職場や国や世界など、自分の人生の基本的条件の見直しを迫られる。それまで安住し、当然のものと考え

てきた日常性への自信が揺らぎ、新しい感覚や意識や考えが心の奥でうごめき始める。

ブックマン博士がアメリカ人であることを全く感じなかったというアフリカ人やアジア人が沢山いた。また多くの日本人が、博士と一緒に過ごしている間「自分が日本人であることを全く意識しなかった。それは戦後初めての体験だった。」と言った。敗戦国日本の傷ついた自意識を優しく包み込む力を、ブックマン博士は持っていたに違いない。神の前では人は皆平等である、と言ってしまえば月並みだが、その事実を自ら体現し、戦後の日本人に謙虚さと人類愛を教えたのがこの人だった。鳩山首相は、来日したブックマン博士を繰り返し官邸や私邸に招き、助言を求め、戦後の日本への貢献に報いるために勲章を贈った。

活動の広がり大きさ

昭和36年(1961)の夏、南ドイツのフロイデンシュタットという小さな町で、84才の高齢で亡くなった時、MRAの活動は文字通り世界を席卷していた。それぞれ数百人の宿泊が可能で、劇場なども完備したスイスのコー、ならびにアメリカのマキノ島の施設に加えて、小田原のアジアセンターも既に建設が決まり、翌昭和37年(1962)10月にはアジア初の拠点として開設が予定されていた。

東京のMRAハウスをはじめとして、世界各国の主要都市の多くには、それぞれ立派な住宅が寄贈又は購入され、多彩な活動を展開していた。ロンドンではパークレー・スクエアという目抜き通りの広場の45番地、昔クライブ(Clive of India)が住んでいたという由緒深い豪邸と、それを囲む7軒余りの高級住宅で、各種の集会や世界的なネットワークの管理、出版事業などが行われていた。

ワシントンではマサチューセッツ通り、日本大使公邸の筋向かいの超一等地に広大な敷地を擁するジャック・イリー夫妻の邸宅を拠点として、上下両院議員をはじめ政府高官、訪米する各国の指導者など、日夜世界の意志決定に参画している人々との間で、緊密な連絡が進められていた。博士が80歳を過ぎた頃からしばしば滞在したアリゾナ州、ツーソンのセブン・アーチェスは、巨大なサボテンの群落に囲まれ、終日日光が降り注ぐ夢のような

家であった。そのほかメルボルンのアーマー、英国西部のターリー・ガース、ニューヨークの郊外に広大な土地を持つデルウッドと呼ばれる邸宅などがあつた。そしてこれらの全てが、ブックマン博士との出会いに触発された多くの人々の寄付によるものだった。

何百という前途有為の人材が、多くの国々で、それぞれの職を離れ、事実上無給でMRAの活動に専従していたし、また数多くの有力な政治家や企業家、知識人や組合指導者など多彩な人々が、ブックマン博士の理想を実現するため、有形無形の支援を提供していた。こうした施設の大きさと贅沢さ、世界を網羅する博士の個人的な交友関係などを見て、MRAの背後に巨大な力の存在を感じ、不審や疑問を持ち、批判する人も多かつた。確かにこれらを通じて博士が持っていた影響力は大きかつた。しかしそれはいわゆる政治的な力ではなかつたし、各国で所有・運営している資産も、経済の論理では計る事のできない性質のものだった。

84年前、アレントウンというペンシルバニア州の小さな町で生まれた一人の聖職者の人生の成果としては、例えどんな紆余曲折があつたとしても、それは確かに驚異的な大きさをもつていた。そしてそれを可能にした原動力の殆ど全ては、ブックマン博士との出会いが周辺の人々の中にもたらした精神的エネルギーだった。博士との接触を通して、心に深く抱えていた憎しみや失望、悲しみや恐れが溶解し、新しい人生が始動された。個人の人生が変わるとき、周辺の体制や力関係を変える力が開放されることを博士は自分自身の体験から熟知していた。自分、ないしは自我という小さい殻を抜け出した魂は、広い世界に誘い出され、より大きな自己実現を求めて、世界再造というブックマン博士の夢の実現に動員されていった。そして、年齢や性別に関わりなく、多くの人々にとって、職場や国の制約を越えて、世界的規模を持つ活動に参加することは優れて刺激的な体験だった。

歴史への挑戦

20世紀の世界は、レーニン、毛沢東、チャーチル、ガンジーなど、その歴史の形成に関与した多くの天才を生んだ。一つの信念と、揺るぎない確信だけを頼りに、独力で世界の歴史に立ち向かつたという点で、ブックマン博士も彼らと同質の人間だったといえよう。

19世紀には個人がその力と尊厳を発見し確立したといわれている。国王や教会や貴族等特権階級の支配が後退し、代わって個人の権利と利益が優先されるようになった。そこから民主主義的な発想が生まれ、それを実現するための各種装置の模索が始まった。また20世紀は社会が社会を自覚した世紀とも言われる。国家社会主義は国という社会の資源のすべてを糾合して世界を揺るがす大戦争を起こした。共産主義は労働者階級の利益を旗印に各国で広範な運動を展開し、世界の風景を一変してしまった。

個人の集団を糾合することで、このように大きな力を発揮出来るというのは人類にとっての新発見であった。しかし力は大きくても方向に問題があれば、大きな危険をはらむことも実証された。ブックマン博士はその矛盾を直感的に感知し、より優れたアプローチを提唱してそれに対応しようとした。国家社会主義は、一つの民族（この場合はドイツ）を動員する事はできたが、他の民族は弾圧するか敵に回すほかなかった。階級という概念は民族よりも基盤が大きく、全世界に拡大することができたが、その階級に属する人々以外とは対立せざるを得なくなった。結果として20世紀はこれらの考え方が作り出した対立軸に振り回され、巨大な悲劇を経験することとなった。

特定の国や階級を優先する考え方は世界の滅亡に繋がるとして、ブックマン博士は、人類の存続繁栄のために、すべての国、民族、階級を包み込む思想を提唱したのである。反発と闘争でなく融合のイデオロギーを掲げて、博士は20世紀の歴史に果敢に挑戦した。そのことが博士の人生を昇華させ、他に例の少ないカリスマを形成させた。しかもブックマン博士の戦略は極めて有効で、世界各地でのつばぜり合いで勝ちを収める事が多かった。

戦後英国の港湾やルール工業地帯など、ソ連側からの強い思想攻勢を受けていた地域で、闘争の渦中にある数人の指導者の人生が変わることで危機が回避された事例が多かった。欧州共同体構想を始動した独仏の合意に果したブックマン博士の役割は、外交史にも記録されている。（Missing Dimension of Statecraft）60年安保闘争の頂点で、加藤シヅエ議員が発表した融合のメッセージは日本の戦後史の流れを変えた。具体的なプロセスや

量的な効果を証明することは困難だが、それぞれの切所で効果的な手を打って流れを変えた例が少なくない。

1990年代以降の共産主義の凋落と崩壊は、当時を知る人にとっては信じられないような展開だった。ロシアや中国と言う大陸国家の資源と人材のすべてを動員した巨大な勢力が突然エネルギーを失うとは、ブックマン博士すら予想していなかったに違いない。しかしある意味ではそれは博士の予言通りの展開だったとも言えよう。「腐った卵ではよいオムレツはできない・・・」どんなに立派で未来志向の制度でも、運営する人の質が悪く、人生の目的が小さければ機能することができない。

いわゆる資本家や一部の権力者による理不尽な搾取を受けた人々の反発と憎しみをベースとした共産主義は、全世界で人々の心をとらえ続けた。しかし分裂抗争を原動力とするイデオロギーは、自分の中にも分裂の芽を育ててしまったとも言えよう。目的の為に手段を選ばない非道徳な方式が組織自体の壊滅に繋がったのかも知れない。制度を運営する人間の道義的弱点を解決できない体制は、官僚的非能率の畏から逃れることができない。冷徹で合理的に見えたシステムが、結局人間の弱点によって壊滅してゆくというのは、ブックマン博士の予測の通りであり、共産主義が機能するにはブックマン博士の提唱した考え方を受け入れることが不可欠だったとも言えよう。

カリスマ・その光と影

ルーテル派の牧師を志したブックマン博士の原点は純粋なキリスト教信仰にあったが、MRAに協力しようとする人たちに、キリスト教への転向を求めることはなかった。しかし、宗派の如何を問わず、各人の良心との対決は当然のように要求された。そしてそれが普遍的な真理である事が明らかであるだけに、それに協力しない決心をすることは困難だった。

ブックマン博士の考え方や態度に、東洋思想の面影を感じる人が多かった。一人の青年がなにかの理由で落ち込んで、性的な誘惑に負け、涙ながらにMRAからの離脱を申し出た。博士は優しく、落ちるときは徹底的に落ちて、泥だらけになって戻ってくるといい、そう

すればもっと効果的な仕事ができる、と言った言葉には、泥が深いほど蓮は美しい花を咲かせるという仏教の物語を聞いているような味わいがあった。効果的な仕事をするのはその人が道徳的に輝いている時だけではない、罪の深さに嘆いていても、正直でさえあれば周辺の人を変えることができるとも言っていた。

アリゾナの家で瞑想に耽っていたある日、中国の人民公社にいる数億の人の事を話した。ブックマン博士は、彼らの苦しみが長く続く事を予想し、ひどく悲しいと言った。それは文化大革命が始まる5年前のことだったが、博士にはいつも全ての人の姿が映っているようにみえた。神の目で世界を見ているような雰囲気があり、それだけに通常の理屈では判断ができない複雑さがあった。宗教、政治、経済、家庭など多様なテーマが、博士の中では渾然と、一つのもののようにつまみ込まれているようだった。それはブックマン博士の類まれなカリスマの源泉となっていたが、同時にその限界ともなったようである。

ブックマン博士は自然体のままで、全世界に広がって行く活動を統轄するための組織や制度を一切作ろうとしなかった。既存の宗教教団や政治組織が、組織の官僚化と人事の停滞によって本来の生命を失ってゆく例は枚挙にいとまがない。それを知り抜いていたブックマン博士は、一切の組織を排除してすべてを個人とその良心に任せようとした。それはいわゆる組織病の排除には効果的だったが、グループの中で意見が割れた時、それを收拾するメカニズムがなかった。そのため博士の死後は、各国各人の活動が拡散し、死の直前まで、明らかに存在した求心力が急速に失われていった。

ブックマン博士に従う人々は彼を深く尊敬していたが、同時にそれぞれの性格や環境に応じて、博士の仕事の中に違う夢を描いていた。博士の持つ宗教性に牽かれる人もある一方で、その信念を世界政治の上で実現することにのめり込んでゆく人もあった。博士の生前は、全ての人が、創始者の願望に従って活動していると考え、安心して協力していた。ところが博士の存在が失われると、宗教活動、青年運動、政治活動など、それぞれの得意な分野を優先的に考えるようになり、運動全体の戦略について意見が分かれるようになった。もともと個人個人の信念と決意を、主たるエネルギー源としていたグループを、その中心

が失われたあとも人工的に組織・統合することは困難だった

個人の自覚だけを原動力として展開する活動としては当然の帰結だったのかも知れない。戦前から戦後にかけても幾多の分派活動があったと言われており、アルコホリック・アノニマス(AA)のように大きな実を結んだ例もあった。スイスのコーを本部として、コー・ラウンド・テーブル(CRT)が毎年開催され、世界の企業人を対象に「コー円卓会議・企業の行動指針」が広く提唱されている。また、博士の死後4年目にアメリカで始まったアップ・ウィズ・ピープル(Up With People)は、米国中心の青年運動として、2年前に解散するまで、世界的規模でかなりの成果を上げてきた。形に限定されず、個人個人がMRAから受け継いだ精神を生かして行くのが、博士を継承する正しい姿なのかもしれない。

そうはいつでもブックマン博士の死後、各国のMRA活動が、改めて知らされたのは博士のカリスマの大きさだった。博士との出会いは多くの人の人生の方向と内容を根本的に変えてしまった。何十年も尽くしてきた党や組織を離脱し、博士の仕事に人生を賭ける人もいたし、なけなしの資産を寄付してトランク一つで生きてゆく決心をする人もあった。そしてブックマン博士は、それらを神の贈り物として受け入れる自信とカリスマをもっていた。

ブックマン博士が臨席する募金集会は、保身と理想のせめぎ合いの場として、いつも異様な緊張をはらんでいた。数時間の会合で1億円近くの資金が集まる事も決して稀ではなかった。それは神の仕業であって、自分は神の意志の謙虚な媒体にすぎない、と博士は言うだろう。しかしその媒体が存在しなければこうした現象が起こらないことも事実であった。MRAアジアセンターの完成は、ブックマン博士の死後一年半後の昭和37年10月のことだった。博士のカリスマは、死後も人々を動かして、信じられないほどの建物ができあがった。しかし在世当時、当然のことのようにして皆が頼りにしていた「打ち出の小槌」は姿を消して、当時の貨幣価値で2億円の借金が残った。時が経つに連れて建物の運営費の捻出も困難となり、非常な努力を続けて、30年後の平成2年(1990)にようやく完済することができた。財団にとって借金からの解放は非常に嬉しかったが、博士の死後は自分たちの器量と実力で生き、かつ活動してゆくほかないことを思い知らされた30年であった。

ブックマン博士の死後41年が過ぎた。色々な構想の下に各国の活動を統合し、活性化する努力が行われているが、博士の在世当時のような形と内容を再現することは出来ないし、望むべきでもないだろう。結局は残された我々の能力の範囲内で、また自分自身で納得できる形で、かつて全世界を動かそうとしたブックマン博士の精神を少しでも生かすべく、最善を尽くすほかないと考えている。

(文責・渋沢雅英)



ロンドン パークレイ・スクエア 45 番地

CD - ROM ユーザーズガイド



警告：このディスクはCD - ROMです。一般オーディオ用CDプレーヤーでは絶対に再生しないでください。大音量によって耳に障害を被ったり、スピーカーを破損する恐れがあります。

アジアセンターODAWARA40周年CD-ROMをご利用になる前に本ユーザーズガイドをご覧ください。CD-ROMでは冊子に収録されなかった写真やパンフレット等がご覧いただけます。内容をご覧いただくにはインターネット エクスプローラー(Internet Explorer) や ネットスケープ ナビゲーター(Netscape Navigator) などのWWWブラウザが必要です。またPDF形式文書をご覧頂くためにはアドビリーダー(Acrobat Reader) が必要です。アドビリーダーは無料でインターネット等から入手することが可能です。

ご利用の方法は、CD-ROMをお手持ちのパソコンのドライブにセットしていただき、後述の起動方法で開始してください。CD-ROMの構成は冊子と同様になっていますが、冊子未収録の写真や資料が多数登録されています。ご覧いただきたいメニューをクリックすると内容が表示されます。多くの写真などが収録されていますので、本文中だけの表示ではなくアルバム形式で多数の写真が表示されるようになっています。パンフレットなど資料につきましてはPDF形式で収録されています。このため本のページをめくるような方式で内容をご覧いただけるようになっています。

ウインドウズ (Windows) 動作環境

OS	Windows 98/Me	Windows NT4.0/2000	Windows XP
CPU	Pentiumプロセッサまたは互換CPU以上推奨		
必要メモリ	32MB以上 (64MB以上推奨)	64MB以上 (128MB以上推奨)	128MB以上 (256MB以上推奨)
ディスプレイ	800×600ピクセル/256色以上 (1024×768ピクセル/16ビットカラー以上推奨)		
CD-ROMドライブ	4 倍速以上		
WWWブラウザ	Internet Explorer 5.5以上またはNetscape Navigator 4.75以上対応		

マッキントッシュ (Macintosh) 動作環境

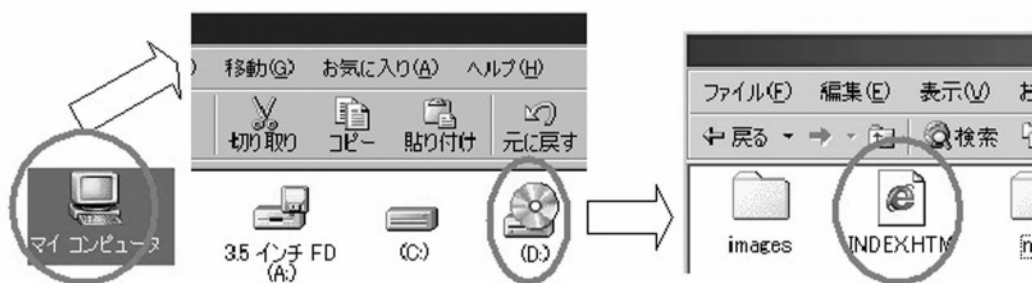
OS	Mac OS9
CPU	PowerPCプロセッサ
必要メモリ	128MB以上
ディスプレイ	800×600ドット/32000色以上
CD-ROMドライブ	4倍速以上
WWWブラウザ	Internet Explorer 5.0以上またはNetscape Navigator 4.7以上対応

ウインドウズ (Windows) 起動方法

以下2つのどちらの操作でも実行することができます。

(1) マイコンピュータをダブルクリックして開きます。次にCD-ROMをダブルクリックして開きます。開いたウインドウの中の「INDEX.HTM」をダブルクリックして開始します。

(ダブルクリック：マウスの左ボタンを2回続けて押すこと)



(ご利用の機器によっては表示順序・表示形式が異なる場合があります)

(2) ブラウザを起動し「ファイル」メニューの「開く」よりCD-ROMの「INDEX.HTM」を開きます。(ご利用のソフトウェアのバージョンの差異により表示が異なる場合があります)

(インターネットエクスプローラーの場合)

「ファイル(F)」メニュー 「開く(O)」でファイルを開くためのウインドウが表示されますので「参照」ボタンをクリックしてCD-ROM中の「INDEX.HTM」を開いてください。

(ネットスケープナビゲーターの場合)

- ・「ファイル(F)」メニュー 「ページ開く(O)」 「ファイルを選択(F)」ボタンでファイル一覧が表示されますのでCD-ROM中の「INDEX.HTM」を開いてください。(バージョン4系)
- ・「ファイル(F)」メニュー 「ファイルを開(O)」でファイル一覧が表示されますのでCD-ROM中の「INDEX.HTM」を開いてください。(バージョン6系)

マッキントッシュ (Macintosh) 起動方法

(インターネットエクスプローラーの場合)

「ファイル」メニュー 「ファイルを開く」でファイルを開くためのウインドウが表示されますのでCD-ROM中の「INDEX.HTM」を開いてください。

(ネットスケープナビゲーターの場合)

「ファイル」メニュー 「開く」で「ページを Navigator で開く」を選択するとファイル一覧が表示されますのでCD-ROM中の「INDEX.HTM」を開いてください。

免責事項

1. 財団法人 MRA ハウスは、アジアセンター ODAWARA40 周年 CD-ROM の使用に関して利用者に直接あるいは間接的被害が生じても、いかなる責任も負わないものとし、一切の賠償等を行わないものとします。
2. 財団法人 MRA ハウスは、アジアセンター ODAWARA40 周年 CD-ROM の内容を事前の連絡なしに仕様を変更したり提供を中止する場合があります。その場合、利用者に直接あるいは間接的被害が生じても、当財団はいかなる責任も負わないものとします。
3. 財団法人 MRA ハウスは、アジアセンター ODAWARA40 周年 CD-ROM の内容あるいは動作にいかなる不備があっても、訂正する義務を負わないものとします。
4. 財団法人 MRA ハウスは、アジアセンター ODAWARA40 周年 CD-ROM に関するご質問、ご意見、ご要望等いかなる問い合わせについても回答の義務を負わないものとします。
5. アジアセンター ODAWARA40 周年 CD-ROM 利用ユーザー各位は、上記各項にご同意いただいたものとさせていただきます。

著作権

1. アジアセンター ODAWARA40 周年 CD-ROM ならびにユーザーズガイドの著作権は財団法人 MRAハウスに帰属します。
2. 財団法人 MRAハウスが許諾を得て収録している文章あるいは画像等に関する著作権はそれぞれの著作権者に帰属します。
3. 現行著作権法で許諾されている事項を除き、アジアセンター ODAWARA40 周年 CD-ROM およびユーザーズガイドの一部あるいは全部を無断で複写複製、転載または翻訳することはできません。

商標について

- Windows は Microsoft 社の登録商標です。
- Macintosh は Apple Computer 社の登録商標です。
- Acrobat は Adobe Systems, Inc. の登録商標です。
- その他の商品名、製品名は各社の商標または登録商標です。

(文中の記載では Trade Mark あるいは Registered の標記を省略しています)

ご注意：CD - ROMより外部ホームページ閲覧の場合はパソコンがインターネットに接続されている必要があります。パソコン側のモデムやブラウザが正しく設定されており、プロバイダとの契約も必要です。接続に関しましては通話料金やプロバイダ料金が発生します。

All Rights Reserved. Copyright © 財団法人 MRAハウス

アジアセンターODAWARA 40周年記念
戦後の日本とMRAの軌跡
平成15年8月 第二版発行

【編集・発行】

© 財団法人MRAハウス

〒106-0047 東京都港区南麻布四丁目九番十七号
電話(03)3445-5111(代表)
ファクシミリ(03)3444-8629

アジアセンター ODAWARA

〒250-0045 神奈川県小田原市城山四丁目十四番一号
電話(0465)22-6131
ファクシミリ(0465)22-2466

【印刷】

(有)3プリントサービス

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷一丁目二十一番五号
電話(03)3478-0118(代表)
